



世界の幸せをカタチにする。

# 武蔵野大学

## サステナビリティレポート2024

### Musashino University Sustainability Report 2024

響き合って、未来へ。

世界の幸せをカタチにする。  
Creating Peace & Happiness for the World



# 目次

本レポートは本学の概要や全体的な取り組みについて扱う「はじめに」、さまざまな観点からみる「SDGsに関する活動」、現状や取り組みについてデータでみる「環境データ」、総まとめとなる「さいごに」の4段階で構成しています。

## はじめに

- P2 本学の情報(キャンパス紹介)
- P3 編集方針
- P4 結びつき
- P5 学長インタビュー
- P7 SDGs実行宣言
- P8 環境マネジメントシステム
- P9 本学と仏教との関わり
- P11 過去100年の歩み
- P12 特集1:学校法人武蔵野大学創立100周年プロジェクト
- P13 特集2:新学科設立
- P14 特集3:SDGsに関わる近年の取り組み

## SDGsに関する活動

- P15 必修授業から見る環境への取り組み
- P17 サステナビリティプロジェクト
- P18 教員による持続可能な社会に向けた取り組み  
鈴木准教授 白井教授
- P19 ゼミでの取り組み  
磯部ゼミ 高橋ゼミ 真名垣ゼミ  
三坂ゼミ 村松ゼミ (以上環境システム学科)  
神吉ゼミ(日本語コミュニケーション学科)  
松田ゼミ(幼児教育学科)  
平湯ゼミ(経済学科)  
小俣ゼミ(社会福祉学科)  
佐俣ゼミ(法律学科)
- P24 選択授業での取り組み  
サステナビリティ学特殊授業A  
環境経済学(経済学科クラス)

- P25 学生主体の取り組み  
学生団体にわたり  
環境システム学科4年千野亜真汰  
つなぎ・つながる・みんなの広場  
アントレプレナーシップ学科4年納田薫
- P27 大学を支える事業者の取り組み  
ロハスカフェ  
ありあけ食堂  
紀伊國屋書店

## 環境データ

- P28 大学内での環境配慮活動の取り組み
- P29 大学内の脱炭素データ
  - ①CO<sub>2</sub>排出量
  - ②電気使用量
  - ③ガス使用量
  - ④有明キャンパス冷暖房システム  
冷温水って何がいいの?  
教授コメント
- P33 大学内の循環系データ
  - ①廃棄物
  - ②資源系
- P37 大学内の自然系データ
  - ①屋上菜園
  - ②両キャンパスの緑について

## さいごに

- P39 外部からの意見  
内部からの意見
- P40 編集後記

# 本学の情報

武蔵野大学には2つのキャンパスがあり、13学部21学科、13大学院研究科、通信教育部など学生数13,000人超が在籍しています。

## 有明キャンパス

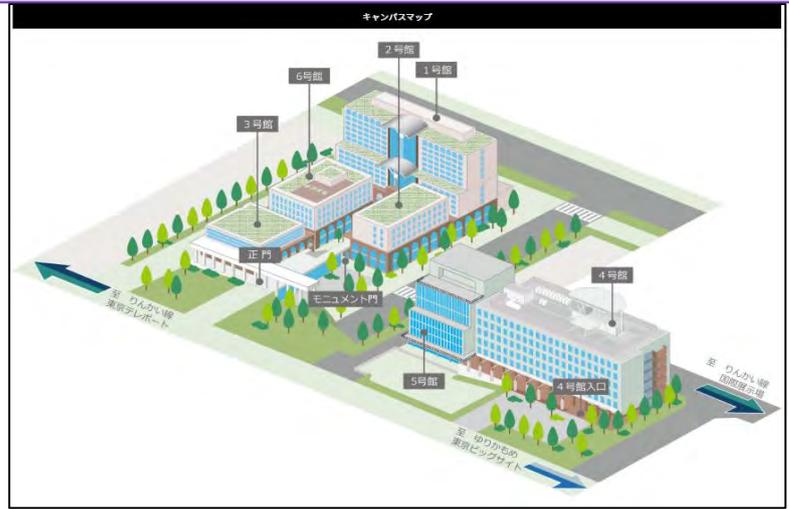
### [特徴]

“BLUE CAMPUS”

都心に近い副都心お台場・有明に位置し、プロジェクト型授業や企業との連携といったビジネスの最前線での教育研究を推進します。

### [設置学部・研究科]

- ・グローバル学部
  - グローバルコミュニケーション学科
  - 日本語コミュニケーション学科
  - グローバルビジネス学科
- ・法学部 法律学科/政治学科
- ・経済学部 経済学科
- ・経営学部 経営学科(旧:経済学部)/会計ガバナンス学科(旧:経済学部)
- ・データサイエンス学部 データサイエンス学科
- ・人間科学部 人間科学科
- ・工学部 サステナビリティ学科(旧:環境システム学科)/数理工学科



- ・看護学部 看護学科
- ・言語文化研究科
- ・法学研究科
- ・政治経済学研究科
- ・経営学研究科
- ・データサイエンス研究科
- ・環境学研究科
- ・看護学研究科

詳細はこちら



## 武蔵野キャンパス

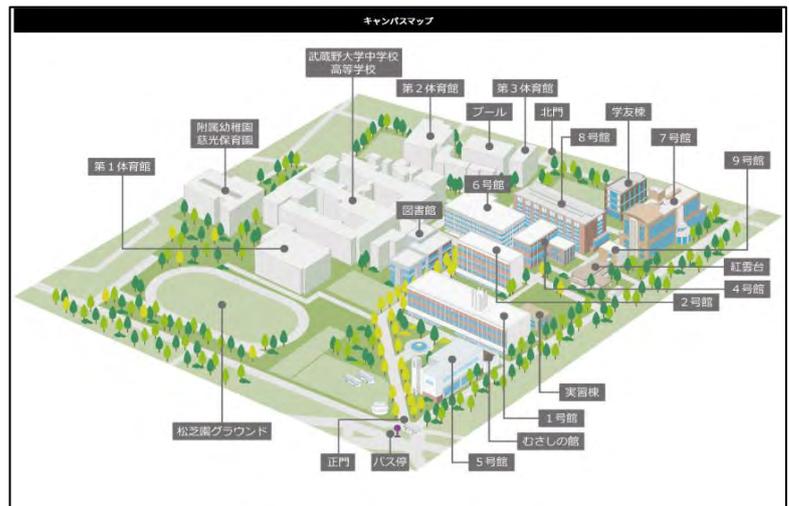
### [特徴]

“GREEN CAMPUS”

吉祥寺、三鷹、武蔵境駅からバスで通学可能です。90年の歴史を持ち、仏教精神に基づいた講話や様々なジャンルの講座を行い地域社会にも還元しています。

### [設置学部・研究科]

- ・文学部 日本文学文化学科
- ・アントレプレナーシップ学部
  - アントレプレナーシップ学科
- ・人間科学部 社会福祉学科
- ・ウェルビーイング学部 ウェルビーイング学科
- ・工学部 建築デザイン学科
- ・教育学部 教育学科/幼児教育学科
- \* 人間社会研究科、工学研究科は専攻によって所属キャンパスが異なります



- ・薬学部 薬学科
- ・文学研究科
- ・仏教学研究科
- ・教育学研究科
- ・薬科学研究科

詳細はこちら



# 編集方針

工学部環境システム学科白鳥ゼミで作成した本レポートについての情報をここに掲載します。

## 編集者コメント

### [作成のきっかけ]

・本学には環境を主に学ぶ学科があり、SDGsにも力を入れているのに環境報告書を作成していないのはなぜか  
・学生である自分が作ることは出来ないだろうか  
・環境報告書を作成している企業や大学は環境に詳しくなくても環境に取り組んでいることが一目でわかるため、環境報告書を作成することで武蔵野大学のアピールに繋がるのではないかと  
上記などの考えを編集者である学生が感じたことで、教授の指導のもとサステナビリティレポートを作成することにしました。

### [目的・ねらい]

- 1.見える形でもっと武蔵野大学の環境への取り組みや武蔵野大学らしさを発信していくため
  - 2.外部に加え大学内での環境への意識を高めるため  
(現在の取り組み状況については28ページを参照ください)
  - 3.環境コミュニケーションとしての役割を果たすため
  - 4.他校との比較により、取り組みのレベルアップを目指すため  
(他大学の状況(環境マネジメントシステム)については8ページを参照ください)
- 本レポートを通して、上記のことが実現されることを目指しています。

### [構成について]

2024年版と2030年以降(目安)版の2段階構成で作成予定  
最終的にはサステナビリティレポート1冊で武蔵野大学を知ってもらえるような総合的な冊子の作成を目指しますが、時間の都合上、2024年版では環境に特化した内容を、2030年版ではその雛形を参考に総合的なものを作成する予定です。(現時点での予定)

### [報告対象範囲]

2023年4月1日～2024年3月31日の期間において行われた教育や研究活動・事業活動等  
\*一部期間外に行われた取り組みについては、ページ内に対象の期間を明記しています。

### [報告対象者]

武蔵野大学で学びたい方・在学生の方・卒業生の方・保護者の方・企業・研究者の方

### [報告内容]

インタビュー実施のページは、インタビュー内容をもとに白鳥ゼミで編集し、個人・団体の許可を得て掲載しています。

# 結びつき

電気・ガス・水道などのライフラインとステークホルダーとの関係性や、SDGsの各項目と各授業との関連性について表にまとめました。

## ライフラインとステークホルダーの関係性

	電気	ガス	水道
学生	○	○	○
教職員	○	○	○
事業者	○	○	○

電気、ガス、水道といったライフラインは誰にとってもいつでも必要なものです。だからこそ、その使い方においては確実に管理をし、またさまざまなことに配慮をする必要があります。データの詳細については29ページから32ページ、35ページを参照ください。

## SDGsのターゲットと大学や授業の関係性

13ページから37ページにはSDGsのアイコンを掲載し、活動の取り組みを可視化しています。(一部ページを除く)  
講義や活動での取り組みがどのゴールと関わっているかを一つにまとめた表を以下に掲載します。

ページ番号	ページ名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
13	特集2:新学科設立	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
15	必修授業から見る環境への取り組み	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
18	教員による持続可能な社会に向けた取り組み				●			●	●		●	●		●				●
19~20	ゼミでの取り組み(環境システム学科)			●	●			●		●		●	●	●	●	●		●
21~23	ゼミでの取り組み(環境システム学科以外の学科)	●	●	●			●		●		●	●	●	●		●	●	
24	選択授業での取り組み				●				●				●	●				
25~26	学生主体の取り組み				●				●	●		●	●	●	●	●		●
27	大学を支える事業者の取り組み	●	●	●	●					●			●					
37	大学内の自然系データ		●	●	●							●	●			●		

# 学長インタビュー

1997年に着任以降、27年間本学の歩みを見守ってきた西本照真学長。本学のSDGsの取り組みや本レポートに関して学長にお聞きしました。

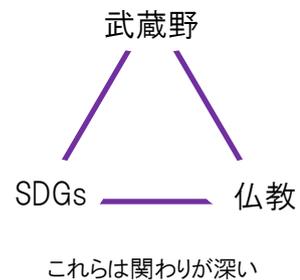
## 西本照真学長

1962年広島県生まれ。1994年に東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程を単位取得後退学。1996年に博士(文学、東京大学)。1997年に武蔵野女子大学(現 武蔵野大学)文学部人間関係学科専任講師に就任。武蔵野大学附属幼稚園長、学校法人武蔵野大学理事、武蔵野大学人間関係学部(現 人間科学部)学部長、同大学大学院仏教学研究科長等を歴任。



サステナビリティレポートを作成するにあたっては、基本的な情報だけでなく、大学の特徴を入れることで「らしさ」のあるレポートができあがると調査を通して学んだのですが、武蔵野大学らしさとは何だとお考えでしょうか？

武蔵野大学らしさは建学の精神とSDGsをかけ合わせたところにあるのではないかと思います。それが集約的に確認できるものとして、SDGs<sup>\*1</sup>実行宣言があります。このSDGs実行宣言は、本学誕生以来の仏教精神に基づいて考えたものです。仏教のねがい『生きとし生けるものが幸せになるために』を実現するために人材を教育し、養成するため、本学が作られました。誕生以来歩んできた教育・研究活動の根っここの部分に本学らしいねがいというものがあり、100年間歩んできたと思います。目指している方向としては、SDGsの基本理念「誰一人取り残さない」と本学の建学の理想「生きとし生けるものを幸せにし」との親和性があることから、本学が歩んできた方向とSDGsは一つに連なるものだと考えています。人間中心の世界ではなく、生きとし生けるもの=地球を守っていこうというねがいをもち、人間中心の生活から決別していこうということに関しては、SDGsの取り組みの中にもあらわれており、仏教精神の中にも同じような気持ちがあるため、仏教はすごくSDGs的であると感じています。



現在の本学のSDGsの取り組み状況についてどのようにお考えでしょうか？

教育の中で、ブランドと共にSDGsを結びつけ、意識しながらどう学んでいくかや教育していくかについてははすごく取り組みが進んできたと思います。取り組みとしては主に2つあります。1つは、全学でのSDGs実行宣言を受け、各学部・学科・研究科がSDGs実行宣言を発表していることです。これにより、様々な学科や教員の取り組みが進んできていると感じています。もう1つは、2021年に、全学共通基礎課程を2010年より行われていた「武蔵野BASIS」から「武蔵野INITIAL」に再編した<sup>\*2</sup>ことです。これまでの一般教養科目からSDGsに基づいた授業であるCHP(Creating Happiness Program)科目を再編した<sup>\*3</sup>ところに、本学がSDGsの教育をするという決意があります。

SDGs実行宣言を発表した2019年から行ってきた取り組みについて、一定の評価はできると思います。

現在の本学の環境への取り組み状況についてどのようにお考えでしょうか？

環境システム学科をサステナビリティ学科に改組<sup>\*4</sup>ということについてはSDGsを強烈に意識しながら、それらを中心に推進していく学科・人材の養成が必要だと感じ、学科を改組しました。しかし、CO<sub>2</sub>削減や電気の消費量の問題などにどう取り組んでいくかということにおいては、取りまとめ、行動をしていかなくてはいけないと感じています。

レポート作成をしていくなかで、SDGsや環境への取り組みなどの活動を行う際には方針が必要だと感じたのですが、方針や全学的に取りまとめる役割などについてどのようにお考えでしょうか？

100周年事業のひとつであるカンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクト<sup>\*5</sup>は、未来に向けて武蔵野大学が建学以来の精神を大切にしながらどう歩んでいくかという時に、重要な意味を持っていると思います。カンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクトが中心となって、次の100年に繋がっていくような本学らしい取り組みになっていけば良いと思います。

また、建学の精神<sup>\*6</sup>に基づいたブランドステートメント<sup>\*7</sup>を実行に移していく取り組みは、しあわせ研究所などを中心的な研究機関として推進していきます。現在は電気、ガスなどのデータにおいて、個別の部署では取り組みを意識しながら行っていますが、そういったデータを全て把握したうえで5年や10年などの期間を設けて本学におけるSDGsの取り組みをどのように進めていくかという未来図や目標が描かれていない状況です。

今後は、これまで十分でなかったSDGsの取り組みを大学として戦略的に実行に移していきたいと考えていますし、そのためには推進するセンターのようなものがあればよいのではないかと思います。

本レポートについて感想やご意見を伺いたいのですが、いかがでしょうか？

本来、大学として作成しなければならないものを学生が自主的に作成してくれたことに感謝すると共に、その姿勢について学ばなくてはならないと感じています。本学でも令和6年度のSDGs白書の発行を予定していますが、その白書と本レポートを比べたとき、学生が作成した本レポートには親しみやすさがあり、学生の思いが表れていると感じました。

今後このような取り組みについてやこういったものを作成することについては、学生と教職員が協力しながら一体となって共同で行っていったら良いと思います。

最後に、読者へメッセージをお願いします。

SDGs、ブランドステートメントの実行においても、武蔵野学生は熱い思いや志を忘れず、こうあってほしいという思いに対して、実現のために果敢にチャレンジし続けていく学生になってほしいと考えています。長い人生から考えると、大学時代はプレハピネスクリエイターであり、社会に出てからが本格的にハピネスクリエイターとして歩んでいく人生といえます。学生時代は、そのための底力や実践力をつける期間として、広く深い実践的な学びをしてほしいです。武蔵野のハピネスクリエイターが育ち、社会でもハピネスクリエイターとして活躍してほしいと思います。



インタビューの様子

[インタビューに出てきた注釈部分(\*)の対象ページ]

*1 SDGs実行宣言について……………	7	*4 サステナビリティ学科について……………	13
*2 武蔵野INITIALについて……………	10	*5 カンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクトについて……………	12
*3 CHPIについて……………	15	*6 建学の精神……………	9
		*7 ブランドステートメントについて……………	9

# SDGs実行宣言

本学は2019年3月に武蔵野大学SDGs実行宣言を発表しました。また、文学部・工学部(2019年11月)、人間科学部(2020年2月)、法学部(2020年3月)、経営学部(2020年11月)、法学研究科(2021年6月)が実行宣言を発表しています。その他、各学部や学科でも実行宣言を発表しています。

## 武蔵野大学SDGs実行宣言

私たち武蔵野大学は、2015年に国連サミットで採択されたSDGs(Sustainable Development Goals)、すなわち17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」の実行に向けて、すべての学生と教職員を挙げて全力で邁進することをここに宣言する。

本学は、1924年、関東大震災の翌年、深い悲しみ、苦しみのなかに、小さな光を灯すように、東京築地本願寺で産声を上げた。「いきとし生けるものが幸せになるために」という仏教の根源的願いは、2024年に創立100周年を迎える武蔵野大学の生命線として脈々と受け継がれてきた。その願いを今日的に具現化していくために、2016年、「世界の幸せをカタチにする。」(Creating Peace & Happiness for the World)をブランドステートメントとして宣言した。

このブランドステートメントの根底には、「世界は、幸せか。」という問いがある。誰もが命をおびやかされることなく、平和に過ごせる世界にできないだろうか。誰ひとりとして、涙している人のいない世界にできないだろうか。生きているものぜんぶが、よりよくなる世界にできないだろうか。このような問いに真摯に向き合い、感覚を研ぎ澄ませ、世界で起きていることを能動的に感じとり、感じ取った課題を解決するためには何をすべきか。互いに知恵を開き合い、一人ではできないことならば、価値観や言葉の境も超えて、異なる力を響き合わせ、世界の幸せをカタチにするために挑もう。在学生、同窓生、未来生、教職員、ブランドステートメントに共鳴するあらゆる個人や団体が力を合わせて、世界の幸せの響創者(Happiness Creator)として歩んでいきたい。これが武蔵野大学の決意である。

国連が採択した「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」には2030年までに、あらゆる貧困と飢餓に終止符を打つこと、国内的・国際的なあらゆる不平等と戦うこと、平和で、公正かつ包括的な社会をうち立てること、人権を保護しジェンダー平等と女性・女児の能力強化を進めること、地球と天然資源の永続的な保護を確保すること、持続可能で、包摂的な経済成長、共有された繁栄及び働きがいのある人間らしい仕事のための条件を作り出すことの決意が表明されている。その上で、「この偉大な共同の旅に乗り出すにあたり、我々は誰も取り残さない」ことが誓われている。国連が取り組んでいるSDGsの「誰一人取り残さない」という基本理念と諸課題の実現とは、本学の「いきとし生けるものが幸せになるために」という根源的願ひ、「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントと軌を一にするものである。

武蔵野大学には、11学部、19学科、12研究科、24研究所・センターがある。私たちは、SDGs実行をここに宣言することによって、各学部・研究科・研究所においてSDGsの17の目標のうち、それぞれが担当する領域に根ざした活動を意識的かつ具体的に行っていく。同時に、ブランドステートメントの牽引役を担う「Musashino University Creating Happiness Incubation」(しあわせ研究所)においては、SDGsの具体的実践とともに真の幸せとは何であるかという最奥部の問いに関する学問的探究も深めていきたい。武蔵野大学は仏教精神に基づく大学であり、それは、単なる論説だけに終始するのではなく、人々の安寧と世界の幸福を求めて具体的な社会活動を実践していく精神にほかならない。象牙の塔にこもるのではなく、街に出て、現場に出て、人々や世界と直に接し、「世界の幸せをカタチにする。」を実現させていきたい。まことに、武蔵野大学SDGs実行宣言の核心はそうした実践にこそある。

2019年3月20日  
国際幸福デー

武蔵野大学長 西本照真

\*「武蔵野大学×SDGs」のサイトに掲載されている文章をそのまま掲載しています。



# 環境マネジメントシステム

このページでは、環境報告書の作成と合わせて重要な環境マネジメントシステムについて他大学の状況と共に、現在の本学の状況について紹介します。

## 1.環境マネジメントシステム(EMS)とは

組織や事業者が、その運営や経営の中で自主的に環境保全に関する取組を進めるにあたり、環境に関する方針や目標を自ら設定し、これらの達成に向けて取り組んでいくことを「環境管理」又は「環境マネジメント」といい、このための組織や事業者の体制・手続き等の仕組みを「環境マネジメントシステム」(EMS-Environmental Management System)といいます。

参考：環境省ホームページ

## 2.他大学の状況

環境報告書の作成は、環境配慮促進法により、特定事業者となっている国立大学ではその発行が義務付けられています。また、義務付けられていないものの、多くの私立大学でも作成が行われています。実際に、本学と同じような環境/サステナビリティ系学部のある大学(一部)について詳細に調査を行いました。

	A	B	C	D	E	F	G
1	名城大学	法政大学	芝浦工業大学	経産大	宇都宮大学	慶応大学	長崎大学
2	大学の方針や組織	目次	目次	目次	目次	目次	目次
3	環境への取り組み(エネルギーなど)	目次	目次	目次	目次	目次	目次
4	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
5	学生主体の環境活動	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
6	SDGs(特に目標13)	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
7	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
8	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
9	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
10	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
11	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
12	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
13	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
14	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
15	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
16	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
17	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
18	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
19	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組
20	環境教育の取組	環境教育や研究活動	環境に関する大学の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組	環境教育の取組

白鳥ゼミ内で調査した各大学の構成の様子

### 共通点

- ・目次、一言、大学の概要、第三者意見
- ・授業や研究など教育課程での環境への取り組みが進んでいる
- ・学生主体の環境活動に取り組んでいる

### 相違点

- ・作成している団体(学生、環境センターの事務の方などさまざま)
- ・大学の特色(キャンパスごとの環境活動など)
- ・評価や環境報告書の基本項目など

また、報告書の作成に伴い、環境マネジメントシステムを構築することは環境省の『環境報告書の記載事項等の手引き(第3版)』からも明らかです。

参考：環境省ホームページ

## 3.現在の管理方法

現在、本学ではこれまで環境報告書の発行や環境マネジメントシステムの構築はしていませんでした。しかしながら、環境/サステナビリティやSDGsに関しては各学部・学科、また教員や学生が多く取り組まれています。エネルギー、廃棄物、資源などの環境負荷についても、関係する事務部門できちんと管理されています。本レポートでは、各学部・学科、教員や学生の取り組み、各事務部門での環境データをとりとまとめ、学内へと広く知らせることを目指しています。

## 4.コメント

環境/サステナビリティの取り組みや環境負荷削減のレベルアップに向けては、組織として目指す姿を描き、それを年次などの目標に落とし、関係する部署・人がそれぞれ取り組みを進め、その結果を取り纏めて目標に対してどうであったのか振り返る。そして、また次の目標を立て、取り組みを進めるといったことを繰り返していくことが必要です。戦略的かつ着実に取り組んでいくために、環境マネジメントシステムなど仕組みを構築することが望まれます。しかしながら、仕組みの構築は簡単ではありませんし、組織の特性に応じた仕組みを十分に考える必要があります。このレポートは本学では初めて取り纏めを行ったものであり、これをきっかけにどのような仕組みが必要か相応しいかの検討を進め、取り組みや環境負荷削減のレベルアップを目指すべきと思います。

(環境システム学科 白鳥和彦教授)

# 本学と仏教との関わり

国際的仏教学者である学祖高楠順次郎、また仏教の考え方は本学の建学の精神とされており、その考え方はブランドステートメントとして理念を具現化する非常に重要なものです。

## 学祖 高楠順次郎



[1866(慶応2)年～1945(昭和20)年]国際的仏教学者。仏教精神を根幹とした人格育成を理想に掲げ、武蔵野大学の母体である武蔵野女子学院を設立。女子教育の必要性と女性の社会進出を肯定的に考えた先覚者でもあります。1944年文化勲章受章。

詳細はこちら



## 建学の精神

武蔵野大学の建学の精神は、仏教の根本精神である四弘誓願(しくせいがん/ほとけのねがい)を基礎とする人格教育です。



学祖は「理想が高まるに従って人格が高まり、人格が高まるに従って高い理想が現出する」※と述べ、仏教の開祖である釈尊を理想の人格として仰ぎ、私たちもその理想に向かって、人格向上の歩みを進めることこそ人生の意義であると説いています。

※高楠順次郎(1924)『生の実現としての仏教』大雄閣

## ブランドステートメント

四弘誓願の理念を前提に、自らの幸せだけでなく他者の幸せをも真摯に希求するところに、目指すべき理想の世界が立ち立てられていくという理念を具現化するため、2016年にブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」を宣言しました。

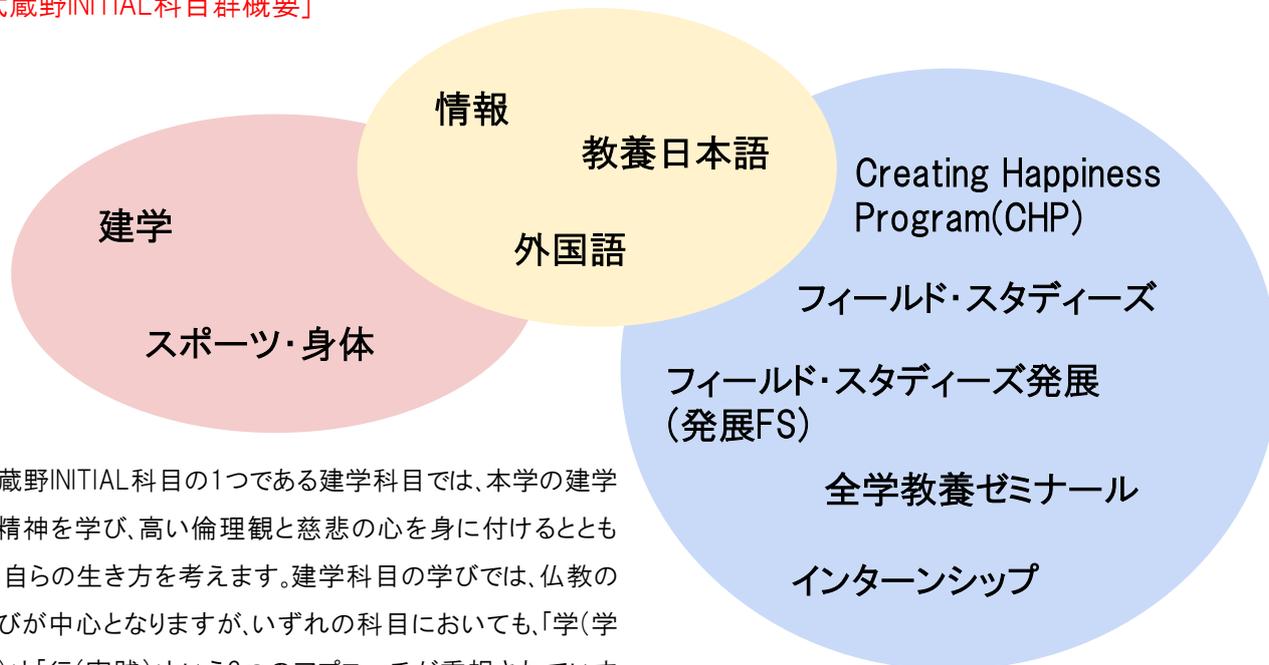


本学のイニシャル「MU」の文字を、螺旋を描くようにデザインしたブランドマークは、感性・知恵・響創力の繋がり、人々の連帯と未来への永続性を表しています。ブランドマークの中央にある地球は、世界的な視座を持つことの重要性を表しています。さまざまな色に変化するマルチカラーは、学生、教職員、本学に関わりのあるすべての人々が生み出す多彩な「世界の幸せのカタチ」を表しています。

## 仏教について

本学では全学生が1年次に全学共通の基礎課程「武蔵野INITIAL」を履修します。建学科目において必須科目として仏教基礎を1年次に学び、仏教発展を3年次に学びます。仏教学研究科(大学院)で専門的な学びを習得することも可能です。

### [武蔵野INITIAL科目群概要]



武蔵野INITIAL科目の1つである建学科目では、本学の建学の精神を学び、高い倫理観と慈悲の心を身に付けるとともに、自らの生き方を考えます。建学科目の学びでは、仏教の学びが中心となりますが、いずれの科目においても、「学(学問)」と「行(実践)」という2つのアプローチが重視されています。さらに、教義や文化として仏教を学ぶだけでなく、現代社会の直面する様々な課題の解決に、仏教の知見を役立てることができるのか、という視点も常に意識することになります。これこそが、学祖の高楠先生が仏教精神を本学の教育理念に据えた、深いお心に通じるものと考えています。

詳細はこちら



### [大学礼拝の実施]

大学礼拝を実施しています。

開催日:学内ポータルサイトMUSCATにて確認可能

時間:12:35~12:55

会場:有明キャンパスでは3-301教室で実施

武蔵野キャンパスでは雪頂講堂で実施

《仏教行事》

同慶節(どうけいせつ)…5月21日

雪頂忌(せつちょうき)…6月28日

彼岸会(ひがんえ)…9月中旬

報恩講(ほうおんこう)…11月28日

散華乙女の追悼会(さんげおとめのついでうえ)…12月3日

### [仏教文化研究所主催の「公開講座」の開催]

毎年異なるテーマ設定のもと、年に5~6回講座が行われます。(全講座聴講無料、申込不要)

時間:14:30~16:00

《2024年度開催の事例》

第1回 6月8日(土)「日本における社会参加仏教:課題と可能性」ワッツジョナサン(国際仏教交流センター研究員)武蔵野キャンパス1号館1102教室

第2回 7月6日(土)「仏教教団の競争協力と平和運動」大谷栄一(佛教大学社会学部 教授)武蔵野キャンパス1号館1102教室

第3回 8月3日(土)「仏教とウェルビーイング-私たちの幸せにどう寄与することができるか」櫻井義秀(北海道大学大学院 教授)武蔵野キャンパス雪頂講堂

第4回 10月5日(土)「仏教と共生-共に支え合うご縁となるために-」吉永丘彦(浄土宗光照院 住職、ひとさじの会 事務局長、大正大学 非常勤講師)武蔵野キャンパス雪頂講堂

第5回 12月7日(土)「仏教の災害復興支援とスピリチュアルケア」井川裕覚(東北大学大学院文学研究科 特任助教)武蔵野キャンパス1号館1102教室

# 過去100年の歩み

2024年で100周年を迎える本学のこれまでの歩みと、SDGsが誕生するまでの世界の取り組みを1つの年表にまとめました。



## 特集1

# 学校法人武蔵野大学創立100周年プロジェクト

武蔵野大学は今年創立100周年を迎え、その記念にいくつかプロジェクトを行っています。特集1ではその中でも「カンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクト」と「創立100周年記念アワード」を紹介します。

## ○カンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクト

建学の精神、ブッダ・ダルマ(仏法の真理観)をダイレクトに見据え、現代社会の諸課題の解決に向けてブッダ・ダルマの意義と可能性の探求および世界への発信をします。世界の著名なリーダー・有識者をカンファ・ツリー・ヴィレッジに招待し、現代世界の課題の解決に向けた対話を実施します。



### [プロジェクト名の由来]

学祖・高楠順次郎の苗字にちなんだクスノキの英語名「Camphor Tree」と、ブッダ・ダルマの幹を縁につどう人々のコミュニティを「Village」と位置付けたところから、「カンファ・ツリー・ヴィレッジ」というプロジェクト名が生まれました。長寿の樹として知られるクスノキの下に、世代を超えた人々が集まり声を交歓してほしいという願いや、風土や文化やあらゆる人々の声が有機的につながる「ヴィレッジ」として、誰もが訪れまた帰ることのできる場所でありたい、という想いを込めています。

“Not Buddhism but Buddha Dharma”

このプロジェクトでは、その根幹に「ブッダ・ダルマ(仏法)」を据えます。なぜ「仏教」ではなく「仏法」なのか。それは、「仏教=Buddhism」という英訳に象徴されるような主義主張(ism)から離れ、ブッダの智慧である「無分別智」に触れる場を開きたいからです。

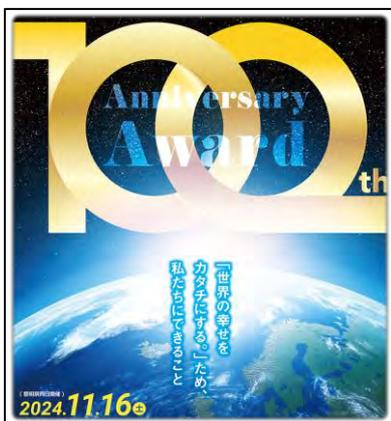


詳細はこちら



## ○創立100周年アワード

～「世界の幸せをカタチにする。」ため、私たちにできること～



令和6年度(2024年)、学校法人武蔵野大学は創立100周年を迎えます。この大きな節目を記念し、みなさんが学校の枠を超えて一つの目的に向けて取り組む機会として、令和6年度武蔵野大学創立100周年記念アワードを開催します。テーマである「世界の幸せをカタチにする。」ことについて、みなさんが考え、実践する活動を幅広く募集し、書類選考を経て選出された団体から優秀賞を決定します。アワードでは、最終選考を通過した団体による活動の成果を発表し、優秀な活動に対しては表彰の上、賞金等が贈呈されます。

\*「創立100周年記念事業プロジェクト」のサイトに掲載されている文章をそのまま掲載しています。

2024年度受賞団体・最優秀賞：中学部門：Media Designゼミ

環境問題のひとつである「海洋ゴミ」を解決しようと考えています。そこで、「海洋ゴミ」を用いたアクセサリを制作し販売することを企画しています。サステナブルジュエリーブランドを立ち上げている学外講師の方のサポートを受けて活動しています。

\*この活動は2024年11月16日に行われたものです。

# 新学科設立

武蔵野大学は2023年度～2024年度の間に日本初の学科を2学科創設しました。特集2では新しく創設した「サステナビリティ学科」と「ウェルビーイング学科」の紹介と、新学科で行われている高校生向けのコンテストを紹介し  
ます。

## ○サステナビリティ学科設立

2023年4月に日本で初めて「サステナビリティ学科」を創設しました。  
それが東京・江東区にある武蔵野大学工学部サステナビリティ学科です。

詳細はこちら



### [特徴]

- ・環境統計や環境計測をはじめとした具体的なスキルを獲得できるカリキュラムであると同時に、仲間とともに実際に持続可能な社会を作ることを通じて学ぶことを重視しています。
- ・教員一人あたりの学生数を約7人としきめ細やかに成長をサポートしています。
- ・学科には、サステナビリティを推進する仕組みや事業をデザインし実行する力をつける「ソーシャルデザインコース」と、環境調査や分析・設計などによって環境問題の解決策を見出す力を修得する「環境エンジニアリングコース」の2つのコースを設けています。

## 高校生SDGs/サステナビリティコンテスト

### [概要]

全てのゴールに関連する活動をコンテストの対象にしています



本コンテストは高校生によるサステナブルな社会づくりに関連する様々なテーマに対する企画、実際の活動・研究の実績を募集しサステナビリティ学科の教員等が審査し、優れた企画や活動を表彰するものです。サステナビリティ学とその実践を「広める・深める」こと、あるいはサステナビリティに掛かる多様な取組みを「つなぐ・つながる」ことで、社会を変えていく役割の一翼を担うことを目指しています。



### [目的と期待すること]

サステナ学科の理想に向けたアクションの一環として、サステナビリティに関心をもつ全国各地の高校生を応援することを目的に、コンテストで表彰されることで、高校生の自信が高まり、さらに社会を変えていく意欲を高めてもらうことを期待しています。また、表彰対象にならなかった高校生にも、審査員のコメントをフィードバックすることにより、さらなる活動の発展を期待しています。

(サステナビリティ学科 白井信雄教授)

## ○ウェルビーイング学科設立

2024年4月に日本で初めて「ウェルビーイング学科」を創設しました。科学や技術の最先端の知見や成果も取り入れた学際的なアプローチによって、幸せ・生きがい・安心・福祉・健康・平和など、一人ひとりの多様な幸せと世界全体の幸せをデザインしカタチにしていける人材を育成する学科です。

詳細はこちら



### [特徴]

- ・幸福論、社会心理学、ポジティブ心理学などウェルビーイングについての知識を身に付けるだけでなく、「たくましさや感性、自分で問いを立てる力といった人間らしい力を学んでいく」ことをめざし、自然体験や地方体験、国際体験にも力を入れています。
- ・スウェーデンやハワイなどへの海外インターンシップも予定しています。

## 特集3

# SDGsに関わる近年の取り組み

特集3では、武蔵野大学のSDGsに関わる近年のニュースをご紹介します。ここでは、留学生の活動や受賞ニュース、武蔵野大学に関連するSDGs関連の書籍についての情報をまとめました。

## ○ウクライナ人留学生が日本人学生3名と母国に関するパンフレットを作成・公開

### [活動のきっかけ]

リアさんはウクライナからの避難民学生であり、2022年9月から本学ランゲージセンターの受入学生として日本語を学んでいます。今回のパンフレット制作は、日本人学生3名が毎週の交流会でウクライナのことを知っていく中で、「もっと多くの人にウクライナについて知ってほしい」「ウクライナについて興味・関心を持ってほしい」「ウクライナについて知ったことを形にして残したい」という思いに至り始動しました。



活動の様子

### [パンフレットの特徴]

- ・パンフレットはウクライナ語・日本語・英語の3カ国語対応です。
- ・ウクライナの基本的な情報(国旗、地図、人口、言語等)のほか伝統料理、行事、歴史、音楽、著名なアーティストやスポーツ選手、観光地等、読者に親しみやすい11テーマを紹介しています。

### [今後について]

今後学生たちは、パンフレットを通して多くの人が「ウクライナ」という国名から戦争だけでなく様々な姿を連想してもらえるよう、ウクライナ学生を受け入れている大学、その他公共施設、企業、ウクライナに関連する施設等に対してパンフレットの設置を依頼していく予定です。

\*この活動は2022年10月から2023年2月に行われたものです。



2023年2月10日に完成したパンフレット

## ○受賞

### プレスリリースアワード2023において「エンパシー賞」を受賞 [2023年]

\*プレスリリースアワードとは:1年間の内に日本で発表されたプレスリリースの中から、発表者の応募に基づき、審査委員会が社会性・公共性・共感性・将来性等の視点から、プレスリリースの可能性拡大に貢献したものを審査・選考し、表彰するもの

### 「GP(グリーンプリンティング)環境準大賞」を受賞 [2020年]

\*「グリーンプリンティング認定制度(GP)」は、日印産連が印刷業界の環境配慮自主基準を達成した工場・事業所を認定するとともに、同基準に適合した印刷製品への「グリーンプリンティングマーク(GPマーク)」を表示することにより、環境に配慮した印刷物を広く普及することを目的とした制度

## ○本の情報

サステナビリティ学科の初書籍  
「キーワードで知るサステナビリティ」



「サステナビリティ学」において重要なキーワードを抽出・整理し、キーワードの定義や重要性、応用・実践例等を解説しているため、「サステナビリティ学」の全体像を俯瞰し、さらに深く学ぶための手がかりを得ることができます。

武蔵野INITIALの教科書  
「SDGsの基礎～みずから学ぶ世界の課題～」



SDGsとはなにか?「SDGsの目指すもの」「SDGsを理解するための重要なトピック」「SDGsと学問との関係」等を大学の教授陣が解説しています。

# 必修授業から見る環境への取り組み

10ページで紹介した「武蔵野INITIAL」科目群の中のCHP科目とフィールド・スタディーズ科目は環境について学ぶのにも効果的な科目です。また、このページでは環境システム学科/サステナビリティ学科での学びについても紹介します。

## ○CHP科目-SDGsに関する授業

\* CHPはCreating Happiness Programの略称です

CHPの主な科目として、SDGsの授業があります。SDGsの掲げる「誰一人取り残さない」という基本理念は、武蔵野大学の建学の精神と共通します。そのため、SDGsに基づいた授業「CHP」で個々の学生が問題意識を持って、主体的な学びと実践の姿勢を身に付けられるようにします。

[×環境] SDGsとは、2015年9月国連で採択された「持続可能な開発目標」のことです。持続可能性は環境におけるキーワードでもあり、17のゴールのうち、ゴール13、ゴール14、ゴール15は特に環境問題解決に向けたターゲットがほかのゴールと比べて多く設置されています。

## ○フィールド・スタディーズ科目-FS/発展FS \*発展FSは選択授業です

大学の外に飛び出し、地方や世界が直面する課題に気づき、解決していくための想像力、実践力を養っていきます。学生同士や受入先の方との深い交流を通して、新しい価値観を育み、視野を広げ、専門課程における目標設定や学びの動機付けを促していきます。

[×環境] 期間:1週間～1ヶ月×場所:国内・国外の70のプログラムから希望するプログラムを選択し、学科横断で実施。地域活性化の企画を考える、特色ある自治体で就業体験をするなどの自治体と連携した学外学修をするため、地域社会を考える機会になります。一部環境に関わるプログラムもあり、短期プログラムでは「世界文化遺産富士山エコツアーから学ぶ自然共生サステナブルな生き方」や、中長期プログラムでは「福岡県大川市 モノ作りの魅力発信プロジェクト」などがあります。

\*プログラムは変更になる場合があります

## SDGs×学外学修アワード 企画プレゼンコンテスト



### 概要

全てのゴールに関連する活動をコンテストの対象にしています

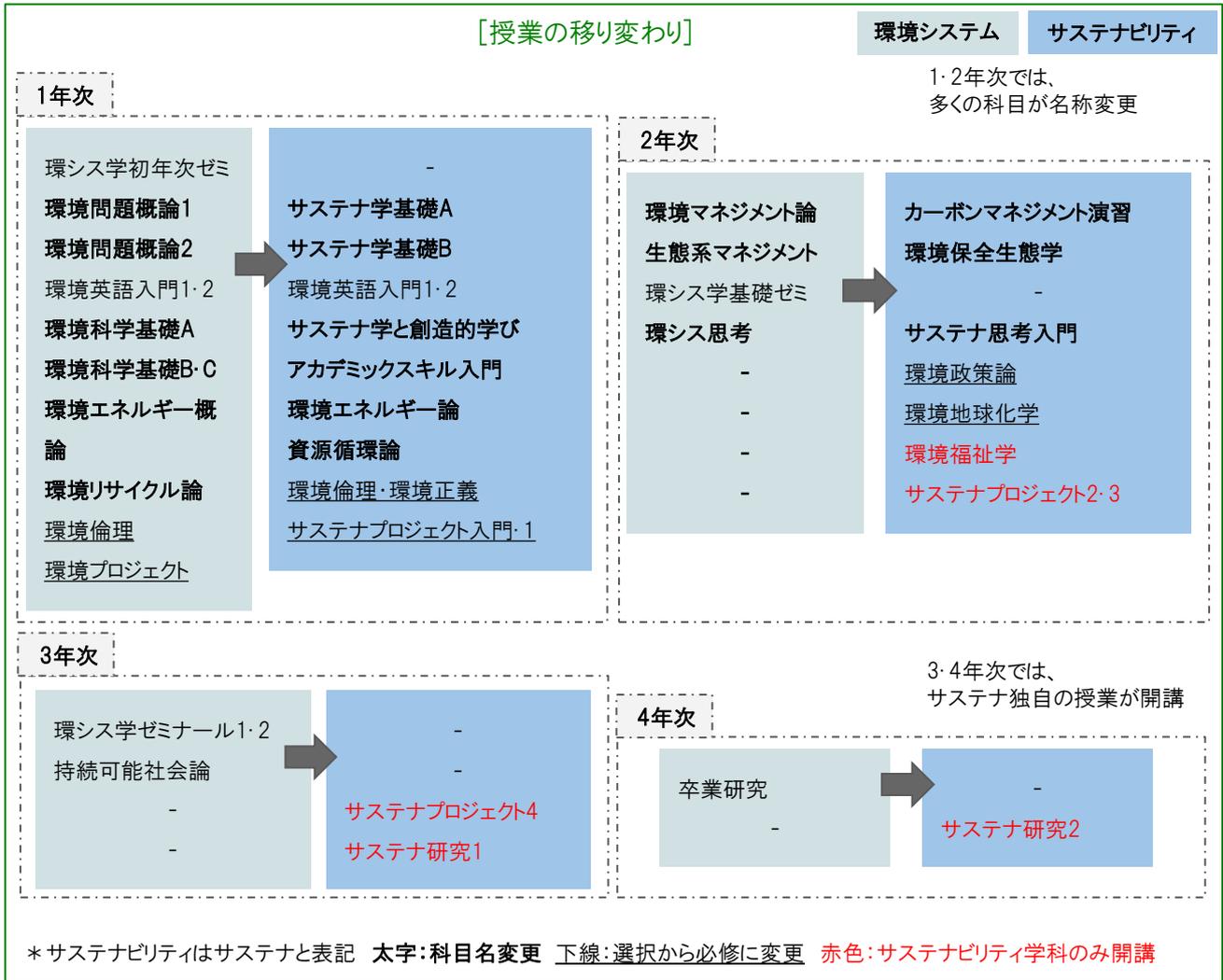
「世界の幸せをカタチにする」人材の育成を目指す武蔵野大学では、全学の生徒に対して、積極的に学外学修プログラム(フィールド・スタディーズ)の機会を提供しています。すでに、数々のフィールド・スタディーズが提供されていますが、魅力的なプログラムを更に増やすべく、武蔵野大学では「SDGs×学外学修アワード」を開催しています。このコンテストでは、実際にFSを体験した学生が「私だったらこんなプログラムがしたい」「こんなことを学びたい・体験したい」を企画としてカタチにし、発表します。

### コンテストの特徴

プログラムの目的や費用設定、実施場所、宿泊場所など、実際に教職員がプログラムを作成する内容を学生が0から考案し、その魅力をプレゼンで審査員に語りかけるため、より実現可能性の高い企画が生まれます。



環境について考えるために必要な基礎知識や歴史、現状について学ぶとともに、より専門的な学びをしながら多種多様な環境問題に対して向き合い方を学ぶことができる本学科では、環境におけるキーワードである「サステナビリティ」を一層大切に幅広い学びを続けていきます。

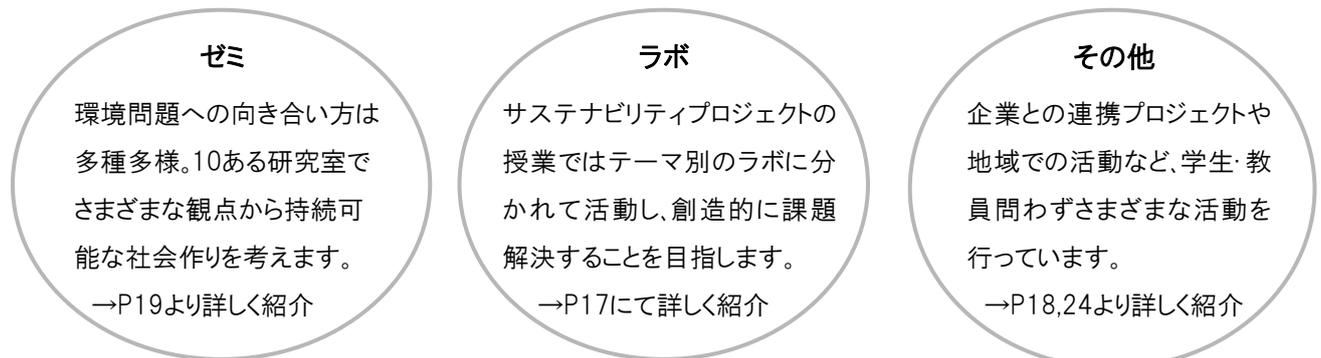


科目名がサステナビリティに変わっただけでなく、1年後期からラボに分かれ、活動を3年前期までの2年間継続して行う体制に変えることで、サステナブルな社会作り実現の可能性向上を目指すと共に、4年間でどのような学びをしていきたいかを考える場の提供にも繋がります。

[選択授業ほか]

[×環境] 本学は自然環境に軸足を置いたジェネラリストを育成する人材育成・認証制度であるECO-TOPプログラムの認定大学です。上記科目の履修やその他の条件を満たすことで東京都からプログラムの修了者として登録されます。平成25年に認定されて以降、本学科からも多くの修了者を輩出しています。

\* ECO-TOPプログラムとは：大学や大学院が自然環境保全のための教育課程を設け、それを東京都が認定する制度です。



# サステナビリティプロジェクト

SDGsを専門的に学ぶ環境システム/サステナビリティ学科では、学生が主体的に社会課題解決を目指して学び、研究、実践するプロジェクトを行っています。

1年生の後期から3年生の前期まで約2年間にわたり、毎週月曜日と授業時間外活動を通じて、サステナビリティに関する社会課題解決を目指して学び、研究・実践する必修科目です。学生は自分の興味関心をもとに自らプロジェクトを立ち上げたり、社会変革に挑戦したり、さらには外部の方々にアドバイスをもらう、コラボレーションするなど、本当にさまざまな形で学んでいます。2年間で学生たちは、課題設定力・プロジェクト企画力・実行力・チーム共創力・専門知識やスキルなど、卒業後にサステナブルな社会をつくるためのスキル、経験を獲得します。



## [ラボの例]

### ○橋本ラボー水環境とサステナブルな暮らし

水環境とサステナブルな暮らしをテーマにプロジェクト活動を行っています。

- ・あらゆる生き物にとって必要不可欠である「水」を活かしたまちづくりの企画運営
- ・小さな自然再生(湿地の再生やビオトープづくりなど)
- ・小さなインフラづくり(雨水活用など)を通じたコミュニティづくり
- ・地域のよさに気づき、ほこりをもてる環境インタープリテーションの実践 など

地域社会のなかで課題に向き合っている人とともにプロジェクトを行っています。たとえば、東京都墨田区にある市民農園に行き、そこでビオトープをつくって子供たちの環境学習の場をつくらせたり、群馬県館林市の里沼(人の暮らしと密接な沼)に行き、里沼の再生、里沼を活かしたまちづくりなどを行っています。

(橋本淳司客員教授)



### ○鈴木ラボー武蔵野大学をごみゼロ化

身近にある社会課題に疑問を持ち、まずは大学生たちの生活を変えていく活動を行っています。

- ・モノの図書館:学生が暮らしで活用するモノをシェアして生産、消費、廃棄を減らす
- ・マイボトルステーション:有明キャンパス(3号館1階とカフェテリア)に設置したウォーターサーバーによるペットボトル削減、マイボトル推進活動を行い、大学組織としての各号館の給水機設置を目指す
- ・教科書ぐるぐる本棚:授業が終わって不要になった教科書を寄付でき、下級生がそれをもたらされる仕組み(4号館プロジェクトルーム内に設置)
- ・エネルギー調査:大学の再エネ100%化を目指し、大学キャンパスの建物ごとの消費エネルギー量を調査したり、大学敷地内外での発電の可能性を探り、提案することを目指しています。



「学生とともに、日本で一番ごみゼロに近い大学『ゼロ・ウェイスト大学日本一』にしたいです。」

(鈴木菜央准教授)

# 教員による持続可能な社会に向けた取り組み

このページでは、普段SDGsについて専門的に学ぶ環境システム/サステナビリティ学科で講師を務める教授方が普段どのような活動を行っているかを紹介します。

## ○持続可能な暮らしを考える

### [現在の主な活動]

人や自然とのつながりをつくり持続可能な社会へ貢献

千葉県いすみ市にて、人と人のつながり、人と自然とのつながりをつくる活動を通じて、持続可能な暮らしと社会をつくる活動を行っています。



いすみ市内で行われた  
ローカル起業勉強会の様子

- ・いすみ発の地域通貨「米(まい)」:約220家族が参加して、できることとして欲しいことのマッチングを通じて困りごとの解決や、モノの循環を生み出す活動。
- ・いすみローカル起業プロジェクト:地域の資源を活かして起業する人同士を繋げ、応援し合う仕組みや、起業家じゃない人が支援できる仕組みを作っています。
- ・パーマカルチャーと平和道場:古民家を再生して、子どもから大人まで持続可能な暮らしと社会をつくる技術を学ぶ場を作る活動を行っています。

### [活動の成果]

まず移住者が増え、持続可能な暮らしの技術を獲得し、日々の生活で活用できる人が増えたことが挙げられます。ソーラーパネルと蓄電池でのオフグリッドや、ロケットストーブでの調理など、持続可能な生活技術のプレゼンテーションができ、地域の災害対応能力が上がりました。

(鈴木菜央准教授)



## ○環境を考える場づくりを

### [現在の主な活動]

学ぶ機会づくりで教育の平等化に貢献

ゼロカーボン社会や気候変動適応に関する新たな気候変動教育のプログラム開発と実践、普及を行っています。様々な政策があるなかで、市民が学べる機会というもの少ないためそのような状況を変えていくことを目的に活動を行っています。

- ・「気候変動の地元学」の全国各地での実践
- ・学会での「気候変動教育研究会」主宰と「気候変動教育の進め方の指針」の作成
- ・有明を起点にした「つなぎ・つながる、気候アクション会議」

気候変動に関するゴール達成への貢献・気候変動への取組みを通じた格差の是正・参加と協働による市民のエンゲージメント・地域活力の向上による地域課題の解決



### [活動の成果]



地域における気候変動教育は、地域の学校による教育、行政による施策、企業による実践と連動しながら実践的な学びを行うのが理想であるものの、実現できていないのが現状です。そのため、学生のプロジェクトにおいて大学生が高校生に対して行う気候変動教育プログラムを開発しています。今後は学生のプロジェクトを進めるとともに、様々な地域での気候変動教育プログラムを広げる社会活動(講演やワークショップ、アドバイス等)を行っていこうと考えています。

(白井信雄教授)

# ゼミでの取り組み

環境システム学科、日本語コミュニケーション学科、幼児教育学科、経済学科、社会福祉学科、法律学科のゼミでの環境問題に対する取り組みや、より良い社会作りへ貢献しているさまざまな活動を紹介します。

## ○窓から社会を変えていく:磯部ゼミ (環)



### [現在の主な活動]

樹脂窓リサイクルで持続可能な建物づくりに貢献

建物の環境評価および建材のリサイクルについて研究・実践的な活動を行っています。今後、社会実装化に向けて活動を進めていく予定です。活動事例としては、「樹脂窓リサイクルビジョン」の策定・公表や「LCCM低層共同住宅適合判定ルール」の開発・公開などがあります。

### [活動の課題・工夫・今後について]

学生に積極的に関わってもらいたいものの、1週間など短い期間で成果が求められることや専門性が高いことから参加してくれる学生が少なく、出身研究室の学生と研究することが多い点が課題だと感じているため、次世代の人材を育てるためにもできるだけゼミの学生に調査、打ち合わせなどに参加してもらうようにしています。

(環境システム学科 磯部孝行准教授)



樹脂窓リサイクルの様子



## ○未来に繋がるまちづくりを目指して:高橋ゼミ (環)



### [現在の主な活動]

リサイクルで住み続けられるまちづくりに貢献

多発する自然災害、止まらない地球温暖化の中で、「自然と人が共生し続けるためにわれわれが今できることは何か？」をライフサイクルの視点でまず考え、限りある資源を大事にしながら、新旧の技術を活用し、人々をしあわせにする環境配慮型生活に移行する研究に取り組んでいます。

### [今後について]

自主的な取り組みに重きを置きつつ、外部講師の方にも参加いただき、様々な活動ができる環境を整え、学生自身が卒業時に少しでも自分自身の成長が感じられるゼミにしたいと考えています。

(環境システム学科 高橋和枝教授)



武蔵野大学都市鉱山プロジェクトの様子

## ○化学物質から人類・地球環境を考える:真名垣ゼミ (環)



### [現在の主な活動]

海洋問題から持続可能な環境に貢献

増加する人口、それに伴う物質利用、領域拡大といった人間活動の増大が、地球環境にどのような影響を与えるのか。この問いに少しでも答えることを目的とした研究を行っています。

### [活動の課題・工夫について]

自ら問題意識をもって主体的に研究を進めるのが基本ですが、良い研究には問題の明確化、アプローチ方法の選択、継続的な実験など様々な必要があります。そのため、到達目標を定めた個別の対応を重視しています。

(環境システム学科 真名垣聡准教授)



海洋プラスチックの回収の様子



## ○都市の暑さ対策によるまちづくり:三坂ゼミ (環)



### [現在の主な活動]

都市における温熱環境を中心に、気候変動に適応したサステナブルな都市やまちづくりを進めることを目的として、都市環境の実測等による評価と環境改善をテーマとして研究に取り組んでいます。

都市の暑さ対策で様々な環境問題解決に貢献



臨海部の暑熱リスクに関する温熱環境調査の状況

### [活動の課題・工夫について]

現在都市の熱環境として最も課題となっている、熱中症対策などの熱ストレス軽減に関する研究に取り組んでいますが、熱中症対策などの暑さ対策は、個人の取り組みと位置付けられていて、まちづくりや都市計画の中で取り組む課題である、という意識が広がっていないことが課題であると感じています。そこで、セミナーでの講演や学協会活動を通じて、まちなかにクールスポットを設けることによる熱中症対策効果の市民へのアピールや、環境省・自治体に対して直接情報を提供するなどの地道な取り組みを進めています。

### [今後について]

温暖化が進み、暑さがこれまで以上に厳しくなることが想像される中で、暑熱環境下でも快適に過ごすことができる空間を広げていくことで、熱中症リスクの低減や暑さによる機会損失の低減を目標に、今後も研究の推進と成果の発信に努めていきたいと考えています。

(環境システム学科 三坂育成教授)



## ○教育や心理から環境を考える:村松ゼミ (環)



### [現在の主な活動]

環境教育や環境心理による教育で多様な考えを創造する場づくりに貢献

環境教育や環境心理をテーマに、精選文献の輪講、ディスカッション、ワークショップ、フィールド調査、グループ研究等を中心としたゼミナール形式による演習を主として、文献の輪講&ディスカッションや、研究手法ワークショップなどの内容を織り交ぜながら進めています。

### [活動の課題・工夫について]

大学の学部レベルの研究といえども、新規性などが求められており、そのためには、相当なエネルギーや時間を費やすことが期待されるが、様々な都合により学生が忙しくテーマに思う存分に格闘できていない学生が少なくないという課題があります。そこで、批判的思考をもって、何事も「とことん考え抜く」とこと、常識や学問の枠組みにとらわれない「Out of box」な見方を身に付けるということの重要性を伝え、ゼミ活動や卒業論文を負担が過重に高い授業科目というネガティブな認知を改めて、大学卒業後の人生を左右する「知的冒険を愉しむ」ことのメイン舞台であることを伝える工夫をしています。



福島スタディーツアーの様子

### [今後について]



ゼミのあり方については、履修学生の希望を最大限に尊重して決めていくので、今後のゼミ生次第であるが、ゼミ研究活動の狭義の成功のみにこだわることなく、変なこと、変な人、ムダなこと、袋小路にハマること(失敗)を面白がることのできるような、心に余裕がある運営に努めていきたいと考えています。

(環境システム学科 村松陸雄教授)

# ○今よりちょっといい社会をつくりませんか:神吉ゼミ ④

## 4つのチームに分かれた活動

異なる分野の対話を通じて豊かな社会づくりに貢献



神吉宇一ゼミ(通称うちゼミ)は、武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科のゼミです。「異なりを価値に、ちがいを力に、対話を通じて今より少しだけよい社会を創造していく」ゼミです。自分たちだけではなく他者との協働によって社会的課題を解決すること、共生社会を実現することを念頭に、学外の様々な関係者とネットワークを創りながら活動をしています。

### [活動の課題・工夫・今後について]

#### ①食の多様性チーム

食の制限がある人たちが暮らしやすいような社会にしようという目的のもと、活動しています。元々食文化に興味がある学生や、日本にハラルのレストランが少ないことに疑問を持った学生などが集まり活動を開始しました。多くの人がヴィーガンなどに対してマイナスなイメージを持っていますが、そうではないということを伝えていき、理解してもらいたいと考えています。



じゅんぐりマーケットでのサメバーガー販売



墨東特別支援学校での交流会  
ポッチャ体験

#### ②特別支援学校チーム

特別支援学校と年に4、5回交流しながら、重度の障害を持っている生徒が社会参加する機会を作り出すことや、コミュニケーションのあり方を学ぶことを目的に活動しています。活動を行う中で、バリアフリーの不十分さや、障害がある方とない方の利便性の感じ方は異なるということを感じ、今後は活動の中で学んだことをより強く発信していきたいと考えています。

#### ③多文化共生プロジェクトチーム

異なる文化背景を持つ人同士が共生する社会を目指し、日々活動しています。多文化共生学のイベントに定期的に参加したり、学生同士で防災カードを韓国語や英語に翻訳し、「防災×多文化共生」をテーマにワークショップなどを行っています。ワークショップを通して防災を周知させることだけでなく、今後は多文化共生の部分をもっと意識し、多国籍の方を巻き込みながら活動していきたいと考えています。



多言語防災カードゲームの啓発活動、「みんなで多文化交流in江東」のcultural exchange活動への参加



アートパラ深川で実施した  
アート鑑賞ワークショップ

#### ④アート鑑賞チーム

江東区で開催されている「アートパラ芸術祭」という、障害を持つ方のアートを展示しているイベントへの参加をきっかけに、アートに興味がない人にも、少しでも身近に感じてもらいたいという思いからアート鑑賞などのワークショップを行っています。現段階では、集客やワークショップでのコミュニケーションに関して課題が残っているため、それを改善していくことでより多くの交流をしたいと考えています。

### [活動について]



うちゼミは、多様な人たちとのコミュニケーションを通して今よりちょっとよい社会をつくっていくことを目指しています。2022年から2024年にかけては、今回ご紹介した4つの活動を中心に行っていますが、今後はさらに「共生社会の実現」というテーマに絞って活動を深化させていきたいと考えています。また、今年度は外部での成果発信を強化していて、6月に日本言語政策学会で、10月に韓国国立仁川大学日本研究所国際学術セミナーでそれぞれゼミ生たちが学会発表を行いました。今後も学術的な観点からの発信を強化していきたいと考えています。さらに、グローバル学部という学部の特性にもう一度立ち戻り、海外での活動も強化していきたいです。

(日本語コミュニケーション学科 神吉宇一教授)

## ○保育に大切なコミュニケーションの場をつくる:松田ゼミ (幼)

＜子育て施設で親子向けワークショップ「おそらのめいろ」を開催＞ コミュニケーションの場づくりで健康と福祉に貢献

東京都武蔵野市にある子育て支援施設0123吉祥寺で開催した「おそらのめいろ」では、学生が施設の一部を「空」や「虹」などのテーマに合わせて装飾したり、子どもたちがワクワクするような迷路や布プールなどを制作し、設置しました。



ワークショップの様子

### [活動の工夫について]

参加する子どもの歳が0～2歳であることやコロナ禍であったことなどから、安全面には特に気をつけて活動を行いました。また、実際に場を見ることが大切だと考え、何度も施設に足を運び、施設の方からもかなり細かく指導やアドバイスをいただきました。

### [活動の成果について]

入園前の子どもたちやその保護者の方にとって、家族以外の人とコミュニケーションをとれる場があることの大切さを感じると共に、子育て支援施設の役割や求められていることを知りました。保育者、保護者、子どもの3者が同時に関わる機会は少ないので、お互いのことを知る機会を作ることが保育支援のさらなる発展に繋がると思いました。

### [活動のきっかけ・今後について]

幼児教育の学びを深めている学生が地域に出る場があるとよいという思いから、子育て支援施設にお願いして実現した活動です。保育に関する知識を地域の親子向けに実践する機会はあまり無いため、その点においてもよい機会になったと考えています。この活動は2か所の子育て支援施設で、3年生自身が考えた企画を行っており、毎年違う内容になっています。



(幼児教育学科 松田こずえ講師)

\*この活動は2022年11月に行われたものです。

## ○経済学部で環境を学ぶ:平湯ゼミ (経)



### [現在の主な活動]

経済×環境に着目し、持続可能な社会の実現に貢献

環境経済学のゼミでは、現在対策を迫られている環境問題の多くが人間の経済活動によるものであることを各自が認識し、まず、経済と環境の関係性を理解することに重点を置いています。

### [活動事例]

- ・近隣の清掃工場、リサイクルセンター等の校外見学  
→廃棄物や3Rについて考える機会に
- ・東京証券取引所の見学と事前学修  
→TCFD(気候関連財務情報開示タスクフォース)やカーボンクレジット市場について  
事前学修を行い、環境関連企業の株式売買動向に注目する機会に
- ・毎年12月のエコプロ見学(東京ビッグサイトにて)  
→企業のSDGsの取り組みを知り、自身の就職活動につなげていく機会に



エコプロ見学時の様子

### [活動について]



新聞記事(おもに日本経済新聞)の活用、環境関連動画の視聴や校外見学を通して多くの事例にふれ、自身で“気づく”ことに心掛けています。また、ディベート交流会(経済学科合同ゼミ)に積極的に参加し、「街にゴミ箱を設置」「エコカー購入」「レジ袋有料化」「紙ストローの使用」等の環境に関連するテーマの是非について、数値データを用いて議論することで日頃の学びを発揮しています。

(経済学科 平湯直子教授)

## ○実際に触れることの大切さ:小俣ゼミ (社)



食品ロス対策と健康支援で様々な人の健康づくりに貢献

### <寿町炊き出しボランティア>

神奈川県横浜市にある寿町での炊き出しのボランティアは、いろいろな経験をしてほしいという思いから、コロナ禍(2019年～2022年)を除き毎年参加をしています。調理以外の野菜や肉の下準備・雑炊の配布作業・皿洗いなどのお手伝いをし、寿町についてのお話もお聞きました。



集合写真



### <きょうだい支援ボランティア>

2023年から病気のある子どものきょうだい支援の活動に参加し始めました。2024年2月に行ったイベントでは子ども達と遊ぶ風船の準備など、ゼミ生が主体的に活動を行いました。6月のイベントではアウェアネスリボン(Awarness Ribon)であるホログラムリボンをビーズで作成したものを配布するため、事前に100個ほど手作りました。

アウェアネスリボン

### [今後について]

どちらの活動も過去の縁から始まったものですが、学生の主体的な姿勢のおかげで長年続けて参加できています。寿町のボランティア活動では、様々なことに気配りすることやあたたかい料理を提供していることが印象に残ったようで、実際に足を運ばなければ得られない学びを多く得ることができたようでした。今後は、通常の活動ではなかなか経験することができないようなソーシャルワークの対象の方向けの活動を行っていきたいと考えています。



(社会福祉学科 小俣智子教授)

## ○ボランティア活動は自己成長の場にも:佐俣ゼミ (法)



山岳少数民族の生活環境を改善する活動で、森林の保全と持続可能な利用に貢献

### <タイ 国際協力ボランティア>

カレン族が居住するタイ北部の山村に滞在し、NGO団体(AFC)が主催する国際ボランティアに参加しました。

### [活動事例]

- ・水道整備
- ・現金収入を得るのに必要不可欠な養蜂箱の整理や修理
- ・現地の小学校で日本の文化を教える活動
- ・村の伝統的な文化の体験



養蜂箱の修繕作業



学生達が建設した貯水タンク

### [活動を通して(学生の声)]

- ・言葉の壁が不安でしたが、メモをとりながら、またはジェスチャーを駆使して、現地の方とのコミュニケーションを楽しみました。
- ・現地の方々は、自然と歩調を合わせたペースで、日々の仕事を楽しんでいました。私自身も仕事への考え方が変わりました。

### [今後について]



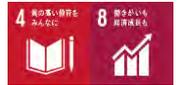
学生時代、北タイでボランティアをしたことから、広い社会のことに関心を持ちました。村を訪れるたび、山の民であるカレン族の「自然観」から多くを学んでいます。学生さんにとっても、国際ボランティアは成長の好機です。異文化、異言語等の「差異」を恐れず、ぜひ挑戦して欲しいです。

(法律学科 佐俣紀仁教授)

# 選択授業での取り組み

環境システム学科、経済学科の選択授業での取り組みを紹介します。以下の科目は専門分野の学びに加え、授業を通して自身について考える場にもなっています。

## ○多様な取り組みを学び未来を考える:サステナビリティ学特殊授業A (環)



### [授業概要]

多様な価値観や考え方・キャリアについて考える機会づくりで学びの向上に貢献

社会で環境やサステナビリティに関する仕事や活動を行っている方を毎回授業にゲストをお招きして、その方の生き方やキャリア、仕事や活動についてお話を伺う授業です。これまで登壇して下さったゲストの方としては、サステナビリティ関連企業の方、起業家の方、省庁や自治体の方、NPOの方、当学科の卒業生などがいます。

### [本授業の特徴]

現実の社会でおこなわれている環境やサステナビリティの取り組みについてのリアルなお話を聞けるところがおもしろいと思います。この授業を受けることでサステナビリティ分野の幅の広さに気がついたり、将来の進路を考えるきっかけになります。また、さまざまな価値観や考え方に触れることで視野がひろがり、自分の生き方に影響を受けたという学生もいます。

(環境システム学科 明石修准教授)



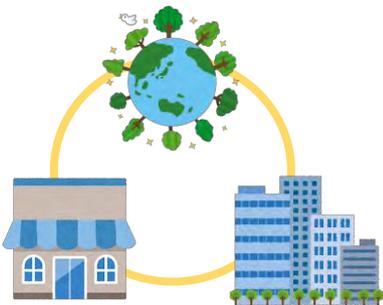
## ○自身の購買行動が持続可能な社会形成に:環境経済学(経済学科クラス) (経)



### [授業概要]

LCAの考え方を重要視し、積極的な環境配慮行動で気候変動対策に貢献

経済学が分析対象とする分野は多岐に渡り、そのような中、経済学の理論・手法と現実のデータを用いて環境問題を実証分析し、解決策を考えて行くのが環境経済学という学問です。



### (授業例)

- ・環境ラベルをテーマとした講義  
→ラベルの概要を調べる、身のまわりのラベル貼付品を探す、ラベルが広く認知されるための方策や自身の購買行動について考える
- ・データでみる経済と環境の講義  
→統計学・計量経済学での学びを活かし、経済と環境に関する指標の相関・回帰分析などのデータ分析を行う

### [本授業の特徴]

購買行動は想像以上に環境破壊をもたらしていることを理解し、ライフサイクルの各段階での環境負荷を定量的に評価・把握するとともに、環境負荷低減を行った企業の努力に気づき、環境に配慮した製品を選択することが必要になります。そのため、自身の購買行動が持続可能な社会の実現の一助となること、この認識を広く共有することを心掛けて講義を行っています。

(経済学科 平湯直子教授)

# 学生主体の取り組み

授業外の時間だからこそ経験できることや、受け身では無く自分が主体となって行うからこそ得られる学びなど、学生が主体となっている活動について紹介します。

## ○「無意識アクション」実現のために:学生団体にわとり(環)

12 つくば大学  
つくり責任  
∞

\*無意識アクション:意識せずに行動した結果、自然と社会に良い影響を与えるものやことを指しています。

3年 清水美知花・小林千夏・戸田二巴・林利咲・今野こもも

リユースの場の提供で資源循環を促進する活動に貢献

### [活動開始のきっかけ]

授業だけでは実際に手を動かす機会が少ないという思いをもったメンバーでチームを組み、2022年11月より活動を開始。服の回収・循環を行う「2nd Clothes」と回収した服からアップサイクルを行う「にわたりの雑貨屋さん」が主な活動です。

### [活動内容・成果]

「2nd Clothes」では、ファストファッションを多く利用する大学生に向けてリユースを手軽にできる場所を提供しています。マネキンの設置、大学内での周知・意識調査、動線に沿ったポスターの製作を通して利用者を増やすことに尽力し、その結果、学内への浸透や利用者様からの好意的な意見、メンバーのスキル向上に繋がりました。他にも、「ゴミ拾い散歩」「他サークルとの古着シェアイベント」「服のアップサイクル品の開発」などの環境問題への実践的な活動も行っています。2023年度100周年記念コンテストでいただいた助成金では、「農」と「食」と「アート」が融合した複合施設の見学を行いました。



「2nd clothes」



「にわたりの  
雑貨屋さん」  
で使用する  
くすみボタン

### [今後について]

「2nd Clothes」を引き続き主軸とし、新たに2つの活動を展開していきます。1つ目は、じゅんぐりマーケット参加後の11月18日に「にわたりの雑貨屋さんウェブショップ」のオープンをすることです。「2nd Clothes」の活動を発展させ、服として価値の低くなったものかいい雑貨に生まれ変わらせます。2つ目は、企業や他団体との映画祭や、企業とのコラボ内容でのじゅんぐりマーケットへの出店などを行う「企業・他団体コラボ」です。それぞれの活動を通して、大学内外でのサステナビリティの意識向上を目指していきます。Instagramでの活動報告にもご注目ください。

## ○ガーデンからコミュニティを:環境システム学科4年千野亜真汰(環)

11 つくば大学  
つくり責任  
∞

### [活動開始のきっかけ]

有明キャンパス屋上にある屋上菜園での経験をもとに、武蔵野キャンパスでも学生、先生、職員、地域の壁を超えたつながりをつくりたいという思いからコミュニティガーデンづくりを2023年10月に開始しました。

コミュニティガーデンづくりで持続可能な地域づくりに貢献

### [活動内容・成果]

- ・コミュニティのデザインとして用いるパーマカルチャーデザインの紹介
- ・場所の観察・DIY(プランターづくりなど)・植物の植え付け
- ・コミュニティ強化に向けてのワークショップやイベントの開催

学びを共有し、理解を深めながらコミュニティガーデンのデザインを考えることができました。DIYや土づくりなど初めての体験に対して協働で行った社会福祉学科のゼミ生たちは好意的に取り組んでくれました。

### [活動の工夫]

コミュニティとして成り立たせるには、多くの人に関わり続けていくことが重要であるため、活動の認知度と頻度を上げていくためにオープンチャットを作成して活動の連絡や報告を行ったり、他学科への声かけを随時行なっています。



植え付けの様子



集合写真

### [今後について]

活動を通じて、学科を超えたつながりをつくることができました。さらにつながりを増やすためにイベントなどを行いたいと思っています。また、社会福祉の観点からもガーデンのデザインを考えていきたいです。

## ○地域のつながりを生み出し防災に強いまちづくりを:

### つながり・つながる・みんなの広場 (環)

4年松本里咲・関口彩  
3年戸田二巴・林利咲・山内亜里寿



地域活性化で防災に強いまちづくりに貢献

#### [活動開始のきっかけ]

代表である松本が、2022年に授業の中で人々のニーズを考えた際、つながりが希薄化していることに危機感を覚え、どうにかして人と人とが、そして人と自然とが繋がれるような憩いの場を作ることにはできないかと考えたことから企画立案し、現在まで約2年半継続しているプロジェクト活動です。

#### [活動内容]

有明キャンパス4号館前の公園を、地域で生活する人同士がつながることのできる憩いの場にすることで、防災に強い街にし、地域活性化を図ります。

主な活動は「公園の環境整備」と「公園を活用したイベント企画」です。

#### <じゅんぐりマーケット>

公園を憩いの場にするためには、まずは地域の人同士のつながりをつくるのが重要だと考え、つながりをつくるきっかけとしてマーケットスタイルのイベントを企画・実施しています。公園の管理会社である東京港埠頭株式会社と共同主催で行っています。2024年11月15・16日に行なった「じゅんぐりマーケット2024」では、2日間で合計約900名の来場者がイベントに参加してくれました。

#### [今後について]

まずは、地域で生活する人同士のつながりを強固にするためにイベントを継続していきたいと考えています。そのためには、このプロジェクトを引き継いでいってくれる仲間や、協力して下さる人を増やしていきたいと考えています。また、地域の人も巻き込んでみんなで作っていくまちにしていきたいです。そして、ゆくゆくは有明キャンパス4号館前のシンボルプロムナード公園を活用し、多くの人が集まれる場所につくり変え、人々の会話の機会を増やし、防災にも強いまちづくりを目指します。



地域住民に配布したチラシ



出展者全体集合写真



イベントの様子

\*この活動は2024年11月に行われたものです。

## ○ローカル線の再建を目指し、活気ある地方を徳島から創る!

### :アントレプレナーシップ学科4年納田薫 (ア)

#### [活動開始のきっかけ]

様々な活動で活気あるまちづくりに貢献



元々徳島とは縁があり、さらに鉄道好きで四国の鉄道に乗った際、現地のローカル線に魅力を感じましたが、その魅力を知らない人が多いことに気づき、自身の力で徳島や鉄道の魅力を広めたいと感じ、活動を開始しました。徳島県海陽町のローカル線、阿佐海岸鉄道の再建を目指し、イベント企画などに携わっています。大学3年間は東京と徳島を行ったり来たりして2拠点生活のようでしたが、地域に住むことで信頼に繋がったり、イベントへの参加のしやすさなどから、大学4年生になった現在は海陽町で生活しています。



道の駅くるくるなと (鳴門市)の視察



世界初の乗り物 DMV(海陽町)

#### [活動内容・課題・成果]

鉄道を貸し切ったり、地域内の人だけでなく地域外の人も呼び込み、ツアーをすることで、海陽町やローカル線の魅力を多くの人に伝えています。県外の人にも来て欲しいという想いがある反面、それが重く受け止められてしまうことが課題であるため、もっと軽くて良いので関わりを持てるよう、自身が広告塔となって巻き込んでいくよう心がけています。活動が評価され、大学内のFS企画コンテストで最優秀賞を受賞。さらに、FS企画コンテストで発表した「徳島ツアー」が、2024年度の発展FSに1つのプログラムとして加わる事が決定しました。

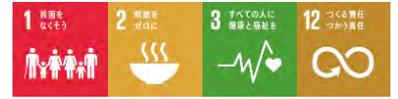
#### [今後について]

いつか学生が徳島に興味を持ってもらえたときにその学生たちが参加しやすい環境を整えていきたいと考えています。また、活動には費用がかかることや、地元の若者も県外に行ってしまうという課題があるので、その点についても学生が成長できるような支援をするために、お金の支援として財団を立ち上げたいと考えています。

# 大学を支える事業者の取り組み

有明キャンパス内にあるロハスカフェ、ありあけ食堂、紀伊國屋書店における環境や社会に対する取り組みについて紹介します。

## ○サステナブルカフェを目指して:ロハスカフェ



有明キャンパス3号館2階入口

食品ロス問題に向き合い持続可能なお店づくりで社会に貢献

### [食品ロスに対する取り組み]

ロスを出さないことを大前提にしています。切り方の工夫、皮はそのままカレーに入れる、骨も火を入れるなどを行っています。それでも残ってしまう部分はスープにしたり、捨てる部分は極力減らすといった「もったいない精神」を忘れないようにしています。できる限りの取り組みを行っても、2~3日で15Lほどを廃棄しているのが現状です。

### [メニューのこだわり]

始めはありましたが、今は学生の好きなものを最優先にしています。材料は調達先次第で変わるため、日替わりメニューを増やすことができ、野菜を中心としたロハスならではのメニューを提供することができます。学生に「定番してほしい」と言われ、定番になったメニューもあります。

### [ごみ処理について]



江東区のルールに従っています。以前は産業廃棄物として可燃ごみで廃棄していましたが、現在は環境システム学科の明石先生との兼ね合いで、残飯などは生ごみとして回収しておき、3号館の屋上で堆肥化しています。

## ○学生思いの食堂:ありあけ食堂



### [食品ロスに対する取り組み]

出庫数を抑えることと、食材の量で調整をする個数制限付きの販売を行っています。個数制限の設定は食品ロス対策には効果的なものの、早く売り切れになってしまうことで利用者のニーズに十分に答えることができないというデメリットもあります。できる限りの取り組みを行っても、1ヶ月あたりで利用者が出した残飯が80kg、厨房内では20食+野菜のくずなど10kgほどを廃棄しているのが現状です。

安くおいしいメニューで健康と福祉に貢献



有明キャンパス3号館1階フードコート

### [ごみ処理について]



大学内の共通ルールに従っています。種類としては、燃えるごみ(紙系)、燃えないごみ(プラ系)、生ごみ、びんかん、ペット、段ボールがあります。

現在アルバイト募集中です！  
ぜひ、一緒に働きましょう

## ○環境配慮がお店作り:紀伊國屋書店



### [取り組み・今後について]

可能な限り資源化すること、リユースを行っています。具体的には裏紙を使うこと、POPや看板といった販促物のパネルの使い回し、段ボールの使い回しをすることです。入荷する本は段ボールに入りますが、新品の段ボールは年に1回程度しか見ないほど、段ボールはリユースが基本です。また、リユース品である「げた(段ボールを包装紙で包んだ箱状のもの)」は商品の後ろに置くことで商品の見栄えをよくするなど陳列の際にも役立っています。今後の取り組みとしては、書店業界全体としてFAXをかなりの量を使用しているため、電子化することができればより環境配慮をすることができますと考えています。

業界全体でリユースを行い資源を守る活動に貢献

チラシ、雑誌、シュレッダー、古紙はきれいにまとめて置いておきます



段ボールは補修して何度も使えます(書店で共通です)

### [ごみ処理について]



大学内の共通ルールに従っています。種類としては、燃えるごみとチラシ、雑誌、FAX、段ボールなどの資源ごみがあります。

# 大学内での環境配慮活動の取り組み

大学における省エネや脱炭素に向けた環境配慮活動について紹介します。今後はより武蔵野大学全体で取り組みを進めていきたいと考えています。

有明キャンパスでは、3号館屋上で屋上菜園を行っており、同館にあるロハスカフェARIAKEでは身体にも環境にも優しいメニューが豊富に用意されています。2021年後期授業より利用されている5号館では学生ホールは吹き抜きのラウンジ空間・熱負荷を軽減する環境配慮型の窓デザインを取り入れていることなどにより環境負荷低減に貢献しています。2021年9月末頃にウォーターサーバーが設置されたことでマイボトルへの給水が可能にもなりました。武蔵野キャンパスは豊かな緑に囲まれ、自然に触れながら学ぶことができます。



有明キャンパス5号館学生ホール



上から見た武蔵野キャンパス

屋上菜園について  
→P37にて詳しく紹介

ロハスカフェについて  
→P27にて詳しく紹介

ウォーターサーバーについて  
→P35にて詳しく紹介

## [省エネに向けた取り組み]



2023年春より、省エネに向けて取り組みを行っています。

- ・節電への呼びかけポスターを掲示
- ・デジタルサイネージ(電子掲示板)の稼働時間の減少
- ・使用していない教室の空調や明かりを学生に見回ってもらい、消してもらう活動の実施  
(学生・教職員に対しての呼びかけ)
- ・服装への配慮で温度調節をしていただきたい
- ・自分が使っていないにもかかわらず使われていない教室の空調や明かりが点いていたら消していただきたい



## [再生可能エネルギーについて]

現在、再生可能エネルギーに関しては有明キャンパスでは5号館、武蔵野キャンパスでは1号館に太陽光パネルを設置しています。(武蔵野キャンパスでは、さらに新たな太陽光パネルの設置を予定しています。)

太陽光パネルは多くの土地が必要となりますが、有明キャンパスの屋上は屋上菜園などで使用しているため、新しく設置することが難しいと考えられていました。そのため、別の土地で太陽光パネルの設置や風力発電を行うという方法が取り組みやすいと考えられます。また太陽光パネルは発電の導入費用がかかるのですぐに導入しづらいという懸念点もあります。

(参照:東京ガス)

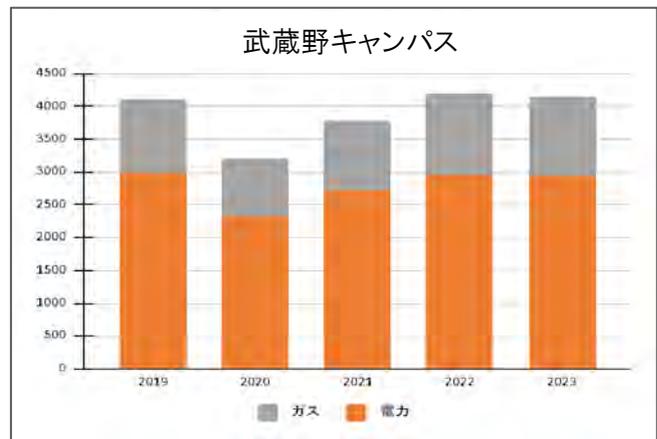
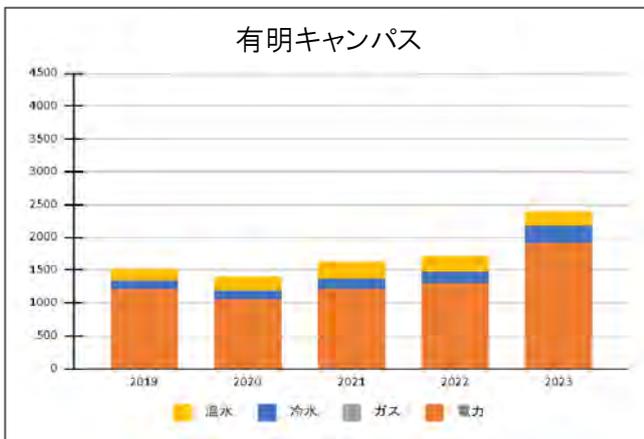
# 大学内の脱炭素データ

大学内のCO<sub>2</sub>排出量やガスの使用量など脱炭素に影響を及ぼす数量や、冷暖房システム、有明キャンパスで使用している冷温水についてまとめています。

29・30ページでは二酸化炭素排出量や電気、ガスの使用量を記載しています。そこから考えられること(年度によって使用量の差、大学内の取り組みの時期と見比べる)や分かることを記載しています。

31・32ページでは有明キャンパスのガスの使用量がとても少ない理由や冷温水の仕組みやメリットを記載しています。また、その冷温水がどれだけ使用されているのかということや、夏の気温上昇がどれだけの冷水使用量の増加につながるのかということについて記載しています。

## ①CO<sub>2</sub>排出量 (千t-CO<sub>2</sub>)



\* 大学だけでなく武蔵野キャンパス内にある高校や中学校での使用量も武蔵野キャンパスのグラフに含まれています。

2023年度の武蔵野大学のCO<sub>2</sub>排出量は、武蔵野キャンパスが4140(千t)、有明キャンパスが2405(千t)でした。上記はそれぞれのキャンパスの年間CO<sub>2</sub>排出量(千t)であり、その内訳はグラフの通りです。

武蔵野キャンパスは冷温水を購入しておらず、冷暖房を電気ではなくガスを使用しているため、ガスの使用量が有明キャンパスに比べて多くなっていました。また、電力の使用量も有明キャンパスの約2倍近くの電気を使用しているため、CO<sub>2</sub>排出量が多くなっていました。

2023年度の途中からコロナ禍が収まり、オンライン授業から対面授業に戻ったことで学生が登校する割合が増加しました。それにより、空調設備や照明の使用率が上がったことと、生徒数が1.2～1.3倍に増加したことが原因となり、2023年度のCO<sub>2</sub>排出量が多くなっていました。

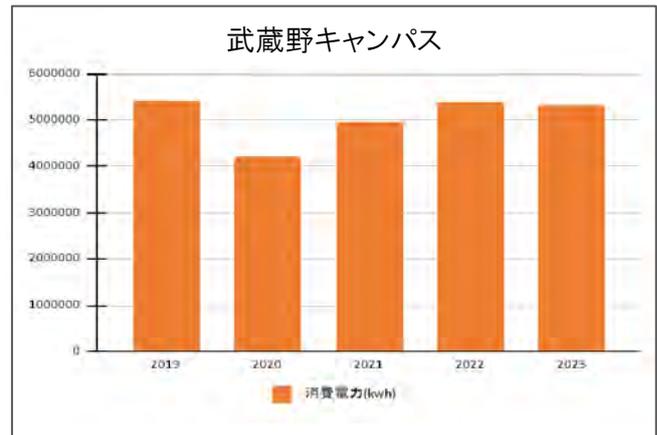
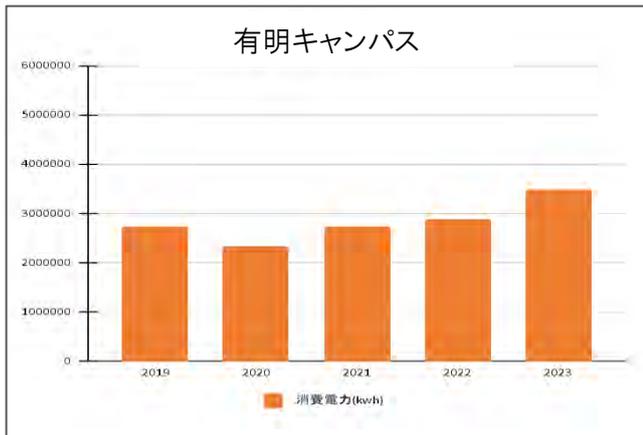
### [考察]

過去5年間の推移をみると、両キャンパス共に2020年度の数値が一番低くなっていました。これは、コロナ禍により大学に登校する機会が減少したということが1番の原因だと考えられます。コロナ禍が鎮静化した後は対面授業が再開し、使用量が再び増加していました。また、2023度ではCO<sub>2</sub>の排出量が少ない電力会社に切り替えました。

### [冷暖房の使用期間]

冷房:6月から9月末 暖房:11月から3月末 \*年度の気候によって適宜調整をしています。

## ②電気使用量

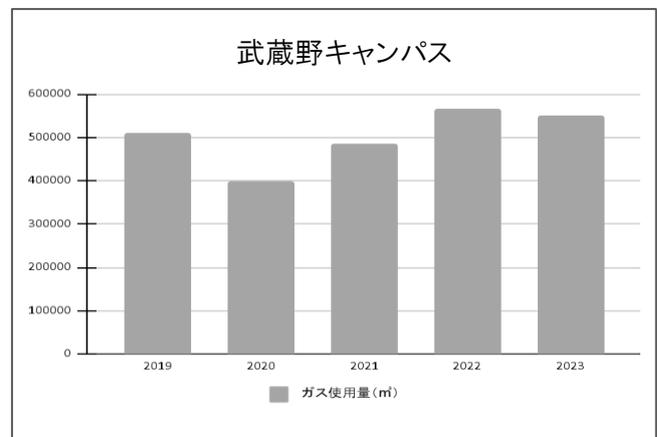
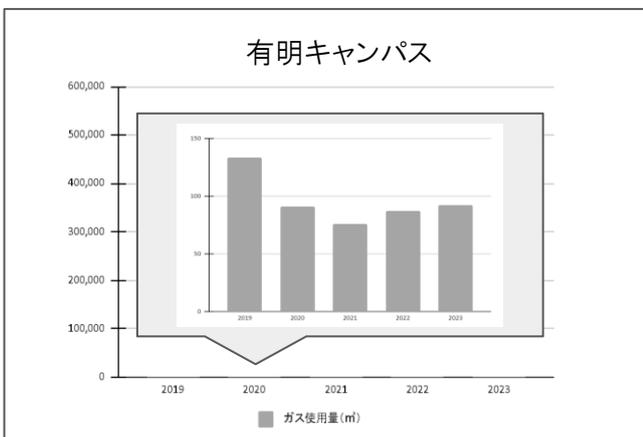


### [考察]

武蔵野キャンパスの方が平均的に多く電気を使用していることがわかります。これは武蔵野キャンパスは有明キャンパスに比べ敷地面積が多く、1教室の面積が大きいことと薬学部の実験設備があることが原因だと考えられます。2023年の有明キャンパスと武蔵野キャンパスの数値において、武蔵野キャンパスは昨年度と比べて減少していますが、有明キャンパスは昨年度と比べて増加しています。

有明キャンパスでは新しい学科やキャンパスを有明に移す学部が増えたため、学生数が増加したことで使用量が増加したと考えられます。

## ③ガス使用量



\*有明キャンパスのグラフが表記上では0となっていますが実際には少量の使用があります。実際の使用量は吹き出し内のもので。

両キャンパスの電気使用量を比較すると、有明キャンパスのガスの使用量は限りなく0に近い結果となりました。これは、有明キャンパスは冷温水を購入し、それを使用しているからです。

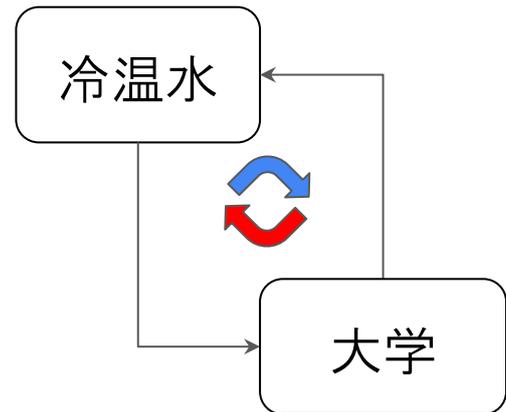
### [考察]

武蔵野キャンパスは、2019年から2020年にかけて減少し、2021年から再び増加傾向があります。これは、コロナ禍により対面授業からオンライン授業に切り替わったためであると考えられます。そのため対面授業が再開すると同時に増え始めています。また、武蔵野キャンパスは空調機の更新に際して、電気ではなくガスを使用して冷暖房を行っているためガスの使用量が増加していると考えられます。

## ④有明キャンパス冷暖房システム



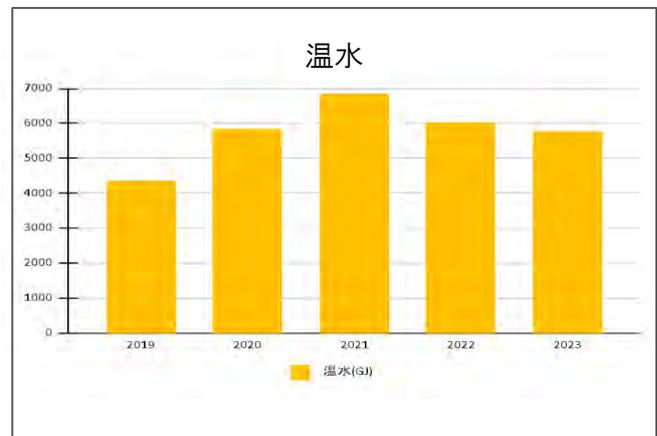
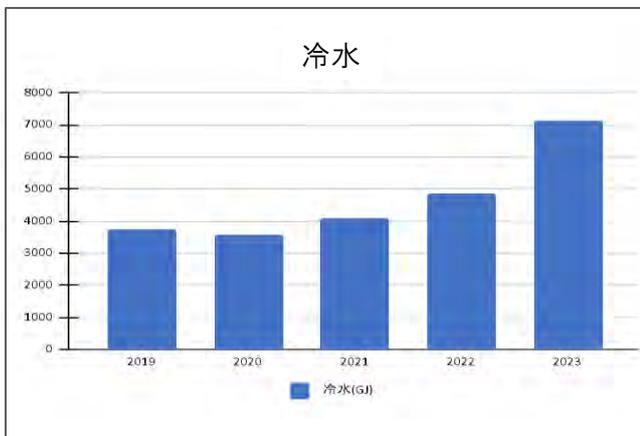
有明キャンパスに冷温水が供給される流れ



### [冷温水を用いた冷暖房システム]

有明キャンパスでは冷暖房の際に電気やガスではなく冷温水を利用しています。冷媒として水を使用しているため、後述のとおりガスを使用するものよりも環境に対して負荷をかけづらいものとなっています。このような冷暖房は大学内のみのシステムではなく、有明キャンパスの所在地である有明地域の「地域冷暖房システム」を活用しています。「地域冷暖房システム」は、1か所または複数のプラントで冷温水等を作り、地域導管を通して一定地域内の冷暖房や給湯を行うシステムです。そのため有明キャンパスではガスの使用量が少なくなっています。

### <使用量>



温水は2021年は使用量が多くなっていますが、これは2020年はコロナ禍、2022年からは学校で暖房の温度を一度下げたことによって使用量が下がっているため2021年以外が少なくなっています。

### [考察]

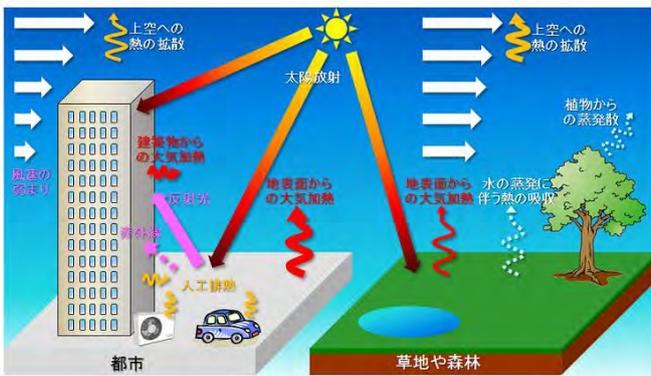
冷水は2023年に使用量が多くなっています。これはここ数年気温が高かったことによる冷房の使用量の増加やコロナ禍の鎮静化により対面授業が行われる割合が高くなり、登校する生徒数が昨年の1.2~1.3倍になったからであると考えられます。これにより、コロナ禍以降は冷水よりも温水の使用量が多くなっていると考えられます。5年間の変化が著しく、コロナ禍では温水よりも冷水の使用量が少なくなっています。これは、夏休みで生徒・教師含む全体の登校数が冬より少ないからであると考えられます。

## 冷温水って何がいいの？



電気冷暖房に比べ、電気はポンプなどの補機動力しか使わないため消費電力を削減できます。空調機器の冷媒が水であり、フロンが発生しないため環境保全につながります。有明フロンティアビルではゴミの排熱を活用しているため、CO<sub>2</sub>削減に貢献できます。また、多くの建物に多くの空気の温度調整の機器を置くよりも、1つの地域で効率のいいものを1個置いたほうが発電の効率がいいため、省エネやCO<sub>2</sub>削減につながります。建物内に熱源施設を構築する必要がないため、火災や地震が起きた際に2次災害を防ぐことも可能です。さらに、熱源施設を置いていたスペースが必要なくなるため、余剰スペースをその他の施設建設(駐車場やヘリポート)などに有効活用することができます。また、運転管理や保守管理が不要となり、管理費を削減できます。都心では屋上に室外機を置いていましたが、熱供給を活用することで屋上に緑化スペースをつくることができます。また、室外機を置く必要がないため都市美観やヒートアイランド現象対策にもつながります。

### [ヒートアイランド現象とは]



都市の気温が周囲よりも高くなる現象のことです。気温の分布図を描くと、高温域が都市を中心に島のような形状に分布することから、このように呼ばれるようになりました。ヒートアイランド現象は「都市がなかったと仮定した場合に観測されるであろう気温に比べ、都市の気温が高い状態」と言うこともできます。

都市化の進展に伴って、ヒートアイランド現象は顕著になりつつあり、熱中症等の健康への被害や、感染症を媒介する蚊の越冬といった生態系の変化が懸念されています。

(参考:気象庁)

## 教授コメント

本学は、東京都の大規模事業所に認定されていて、毎年エネルギー使用実績と削減計画について報告する義務があります。また今年度から「建築物ホールライフカーボン算定ツール(J-CAT)」もIBECsからリリースされました。ますますカーボンニュートラルに向けた取り組みが必要となりますので、本学の省エネ・省資源化に向けたさらなる対策が望まれます。

(建築デザイン学科 金政秀教授)



# 大学内の循環系データ

大学内の廃棄物の分類・処理方法・排出量・食品ロスについてや、水の使用量・ウォーターサーバーの利用状況・紙資源の使用量・ペットボトルキャップの回収に関する数値についてまとめています。

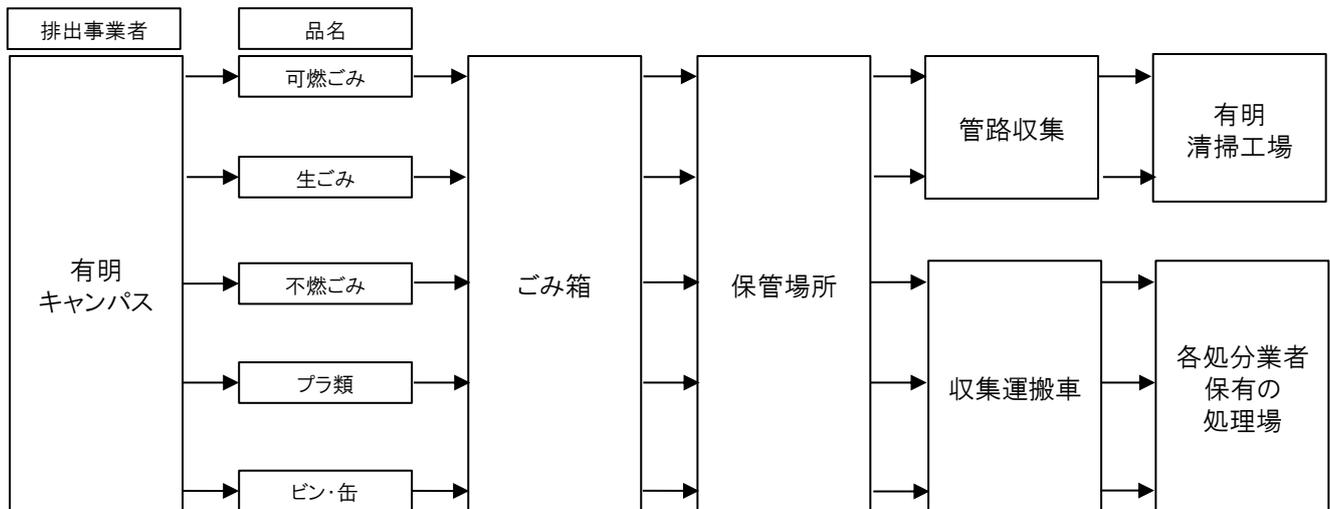
## ① 廃棄物

[分類方法について]

武蔵野大学ではもえるごみ、プラスチック、ペットボトル、ビン・カンのごみ箱を各所に設置し分別をしています。

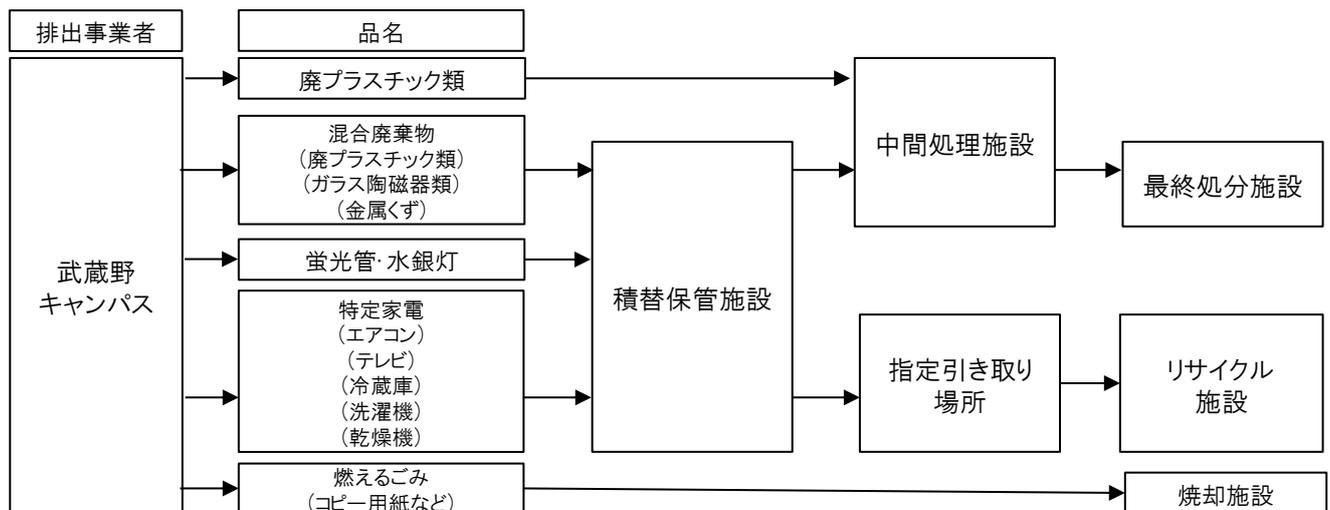
[処理の仕方について]

有明キャンパス



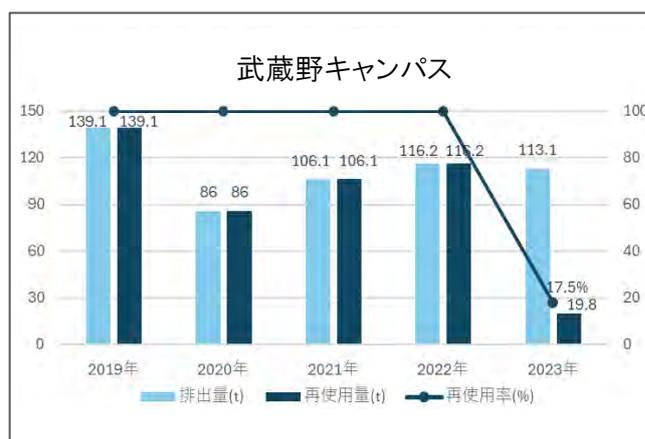
有明清掃工場で処理されます。安全で衛生的なごみの焼却を行っています。また、ごみを焼却するとき発生する熱を利用して発電を行い、さらに有明スポーツセンターに温水、臨海副都心に蒸気を熱源として供給しています。

武蔵野キャンパス



蛍光管・水銀灯、特定家電においては、リチウムイオンバッテリーが内蔵されている可能性や、有害物質が含まれている可能性があるため、積替保管施設にて分別及びバッテリーを取り除く作業が行われています。なお、燃えるごみには生ごみも含まれます。

## [廃棄物排出量・再使用量の推移]



\* 大学だけでなく武蔵野キャンパス内にある高校や中学校での使用量も武蔵野キャンパスのグラフに含まれています。

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴って、学生・教職員等のキャンパスへの入構が大幅に減少したこと等により、有明キャンパス・武蔵野キャンパス共に廃棄物排出量は前年度のおよそ6割にまで減少しましたが、2021年度以降は入構者が増加してきたため、廃棄物排出量は感染拡大前の水準に戻りつつあります。しかし、オンライン講義が感染拡大前と比較して多い状態であり、またキャンパス内の講義や事務などにおいてもペーパーレス化を推進していることなどにより、紙使用量が減少しており、廃棄物排出量は両キャンパス共に2019年度よりも少なくなっています。

再使用率において、武蔵野キャンパスの再使用率および再使用量が2023年度に大きく下落しています。これは、紙などの可燃ごみを焼却した際に生じる熱を活用するサーマルリサイクルを、再使用率の統計に含めなくしたためです。廃棄物に占める紙などの可燃ごみの割合が非常に大きいことが分かります。

## [食品ロスの量]

### ロハスカフェ

生ごみと残飯は、2～3日でコンポスト用のバケツがいっぱいになるくらいで、残飯の量に左右されます。



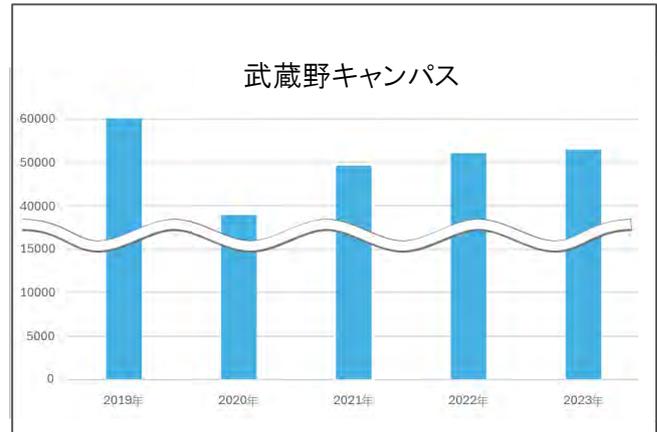
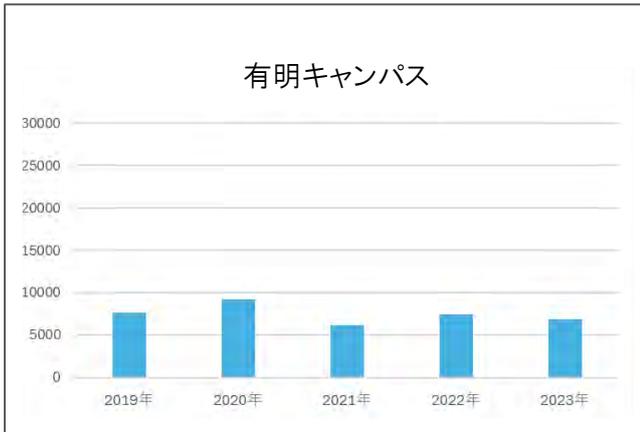
\* コンポストとは、生ごみを土と混ぜ、堆肥に変えるための容器のことです。満タンは15ℓです。

### ありあけ食堂

オーダーミスによる廃棄と残飯、野菜くずが発生します。毎月、オーダーミスは20食分、残飯は80kg、野菜くずは10kgほど発生します。

## ②資源系

### [水の使用量]

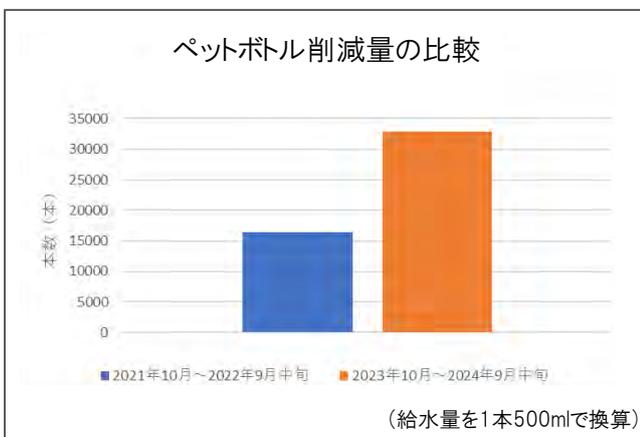


\* 大学だけでなく武蔵野キャンパス内にある高校や中学校での使用量も武蔵野キャンパスのグラフに含まれています。

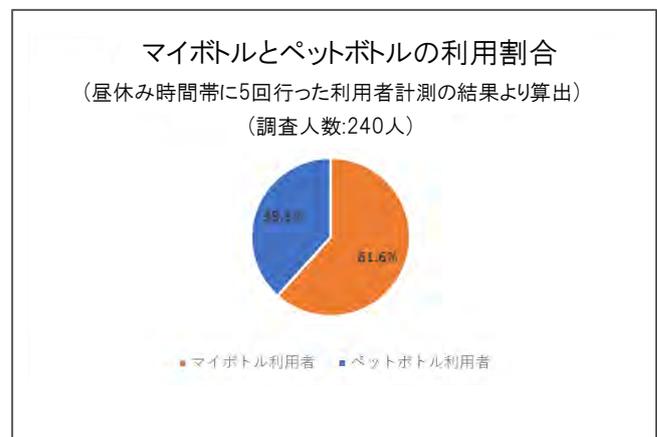
有明キャンパスでは、2020年度が最も使用量が多くなっていますが、これは新たに竣工した6号館の屋上に灌水装置があり、上水を使用することによるものと考えられます。そのため、コロナ禍にも関わらず使用量が前年度より増加しています。

### [ウォーターサーバーの利用状況]

環境プロジェクトをきっかけに、ペットボトル利用削減を目的に2021年9月より有明キャンパス3号館に2つウォーターサーバーを設置しています。これまで複数回Teamsや学内ポータルサイトを通じてアンケートを行っており、調査の結果、サーバーやマイボトルを使う理由として最も多かった回答が「経済的であるから」でした。サーバーを使っていない理由としては「マイボトルを持っていないから」、また半数以上が「設置場所を知らないから」と回答しました。マイボトルを使っていない理由としては「洗うのが面倒」「かさばる」「重い」という理由があげられ、中にはペットボトルをマイボトル代わりにしてサーバーで給水している人もいます。今後は、マイボトル利用者増加や認知度増加のためのポスターでの宣伝や増設、武蔵野キャンパスへの設置などさらなる活動の向上を検討しています。

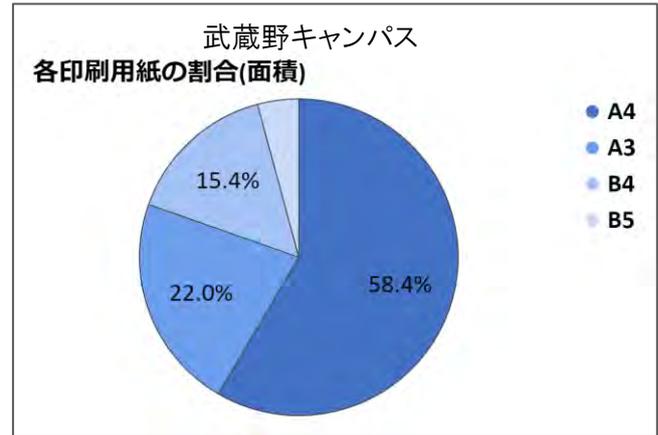
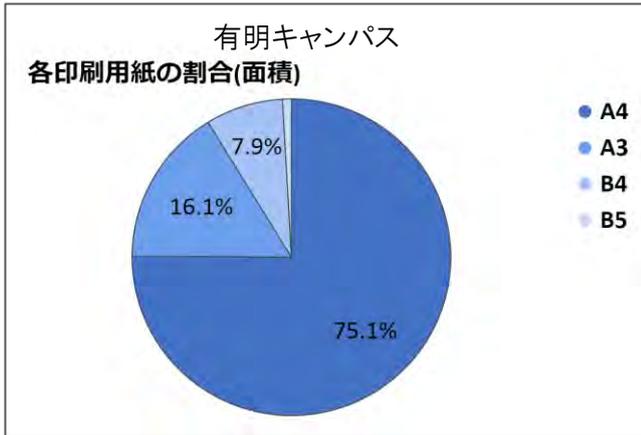


ペットボトルの削減量は、2021年～2024年の3年間で約80,300本となり、現在と2年前を比べると2倍の削減が達成されました。



マイボトル利用者の方が多くものの、ペットボトル利用者も一定数いるのが現状です。利用頻度は1日に3回以上利用する人もいます。

## [紙資源の使用量]

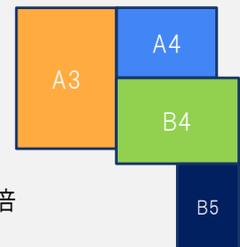


令和5年度の印刷用紙の種類はA4・A3・B4・B5の4種類あり、全ての用紙をそれぞれA4用紙に換算すると、このようになります。

有明キャンパス	武蔵野キャンパス
・A4用紙:2,505,000枚	・A4用紙:3,980,000枚
・A3用紙:537,000枚分	・A3用紙:1,497,000枚分
・B4用紙:約262,480枚分	・B4用紙:約1,049,921枚分
・B5用紙:約29,998枚分	・B5用紙:約284,979枚分
→合計:A4用紙約3,334,000枚分	→合計:A4用紙約6,812,000枚分

### [大きさ目安]

A4用紙:210mm×297mm  
A3用紙:A4用紙の2倍  
B4用紙:A4用紙の約1.5倍  
B5用紙:A4用紙の約0.75倍



## [ペットボトルキャップ回収について]

ペットボトルキャップ回収は、環境サークル「エコの民」が行っています。各キャンパスに設置されているゴミ箱の横にキャップ回収ボックスを設置し、約1カ月に1回程度回収ボックスからキャップを集めるとともに、適宜専用の回収業者に引き取っていただいています。キャップ回収量の具体的な数値については統計を取っていないものの、キャップを回収する際、ほぼ毎回キャップがボックスの半分以上入っていることが確認されていることから、回収ボックスの設置には一定の効果があると考えています。今後は、掲示物や呼びかけなどを通して、さらにペットボトル容器とキャップの分別を促していくとともに、使用者に対し環境に対する関心を持ってもらうための取り組みをしていく予定です。また、キャップの回収状況が一目で分かるようにするなどといった、キャップ回収ボックス自体の改修・改良も検討しています。



キャップ回収ボックス

## [エコの民とは?]



街中で広い集めたごみ

エコの民とは、キャップ回収やゴミ拾いなどをはじめとした環境改善に貢献するための活動を行っているサークルです。主な活動内容は、上記の学内ペットボトルキャップ回収や大学周辺のごみ拾い、毎年開催されるスポGOMI甲子園などをはじめとした大規模なイベントへの参加などで、他大学の環境系サークル・部活との交流および合同活動も積極的に行っています。部員の所属する学部・学科はさまざまであり、活動にあたっては幅広い価値観や意見を尊重することが、当サークルのモットーとなっています。活動頻度は月2回程度で、比較的気軽に参加・活動が可能な性質を持つことから、他の部活やサークルとの兼部をしている部員も多く見受けられます。

\*エコの民は、武蔵野大学の公認クラブです。

# 大学内の自然系データ

屋上菜園についての概要や、その取り組みによる効果、両キャンパスの緑被率に関する数値についてまとめています。

## ①屋上菜園



有明キャンパスの3号館では屋上菜園を行っています。  
パーマカルチャーの「人と自然が共生し持続可能な環境をつくるためのデザイン手法」の考え方をを用いて、自然循環型の菜園やコンポスト、養蜂などを行っています。



養蜂の様子

週に1回、武蔵野大学の学生や教職員が参加できるオープンデイを開催して、菜園ツアーや農作業のほか、収穫したものを一緒に食べたり、思い思いに過ごしたりしています。毎週様々な学部の学生や教員、職員が集います。



集合写真

### [自然のリジェネレーションと人と人のつながりを生む]

活動は、パーマカルチャーの3つの倫理に基づいて行っています。

#### ①地球への配慮

無農薬・無化学肥料での栽培や、ロハスカフェの生ごみたい肥化などにより、環境に負荷を与えず、自然生態系を再生する。

#### ②人々への配慮

人と人のつながりを生み、コミュニティをつくる。それぞれの人のニーズや多様性を大切に、それぞれの人が自分らしくいられるようにする。

#### ③余剰物の共有

収穫した恵みをみんなで分かち合う。それぞれの人がもっている知識やスキルをシェアする。

### [活動成果(SDGsへの貢献度)]

- ・サステナブルな食料生産システムによる効果で貢献
- ・自然と触れ合ったり身体を動かすことによる健康への効果で貢献
- ・参加者が自然のつながりやサステナビリティについて理解することを支援する場の提供による効果で貢献
- ・廃棄物の削減やコミュニティの場づくりによる効果で貢献
- ・緑を増やし、様々な生きものが暮らす場づくりによる効果で貢献



屋上菜園Ariake Rooftop commons

### [コメント]

始める前と比べて明らかに生き物(蝶、トンボ、鳥、植物など)の種類が増えました。ガーデンツアーや菜園の体験は、自然の循環やサステナビリティについて学ぶ機会になっていると思います。また、いろいろな学部の学生や留学生などがつながる場になっていたり、居場所になっていたりします。去年、菜園活動に参加している人のつながり(ソーシャルキャピタル)やウェルビーイングを調査したのですが、参加する前と比べて両者とも大きく向上していることが分かりました。

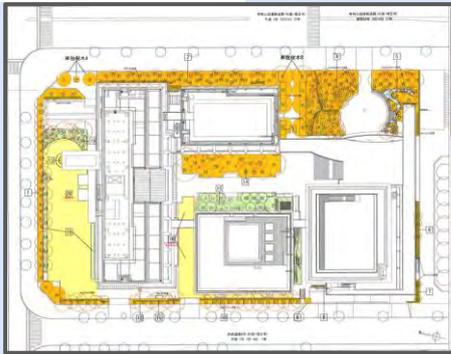


(環境システム学科 明石修准教授)

## ②両キャンパスの緑について

### 有明キャンパス

#### [両キャンパスの緑被率]



敷地緑比率:40.71%

#### [炭素蓄積量(t)と炭素固定量/年]

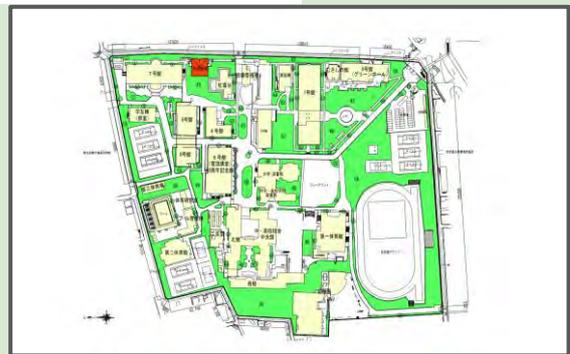
炭素蓄積量13.15t  
炭素固定量1.404t/年

#### [緑の効果]



### 武蔵野キャンパス

#### [両キャンパスの緑被率]



敷地緑比率:27.13%

#### [炭素蓄積量(t)と炭素固定量/年]

今後測定予定

#### [緑の効果]



炭素蓄積量が多いということは、植物内に収められている炭素の量が多いということです。この数値が高いということは、それだけ温暖化を抑制できているといえます。

緑が増えると炭素固定量が増加するため、炭素蓄積量と同じように温室効果ガスがそれだけ固定されていることになり、緑地を増やすことは二酸化炭素を含む温室効果ガスの炭素を固定して貯蔵することが可能になるため温暖化を抑制することにつながります。

緑による日射の遮断や蒸発散作用等による気温の上昇の抑制から、都市部において大規模な緑地を形成することでクールアイランドと呼ばれる冷涼な空気の塊をつくり、ヒートアイランド現象の緩和に効果を発揮するといえます。

(参照:国立環境研究所)

#### [コメント]



今回有明キャンパスの樹木の炭素固定量・蓄積量の計算はi-Tree Ecoというソフトを使って行いました。学生が構内に植栽されている樹木の樹種と胸高直径(cm)のデータを取得し、そこから算出されたものです。このソフトではそれ以外に樹木の大气汚染物質除去量や雨水流出削減量の計算にも使用することができ、街路樹の生態系サービスを数値化できる便利なツールです。今後は武蔵野キャンパスの街路樹も評価してみたいですね。

(環境システム学科 伊尾木慶子准教授)

# さいごに

大学外部・内部からいただいた本学のレポート・本学の取り組みに対するご意見と、編集後記を掲載します。

## ○外部からの意見

[千葉大学 大学院 社会科学研究院 倉阪秀史教授] (千葉大学 環境管理責任者(教員系))

大学の環境報告書を学生主体で作成するという試みに心から敬意を表します。環境面だけでなく、社会面も含めたサステナビリティレポートにしていくべきだと思いました。また、「ウェルビーイング」が第6次環境基本計画で最上位の目標に定められたので、「ウェルビーイング学科」の活動も具体的に掲載すると良いと思います。さらに、活動に参加する学生の写真も掲載した方が良いと思います。今後、大学として環境マネジメントシステムを構築し、PDCAを回した結果として報告書を発行されることを期待します。

[株式会社エイチ・ユー 代表取締役社長 山田建志様] (法政大学 環境センター 前課長)

編集方針の「目的・ねらい」にある環境への取り組みに関する情報発信、環境への意識高揚、環境コミュニケーションについては十分に達成しているレポートでした。一方、他校との比較に関しては武蔵野大学の強みや弱みを把握して、今後の取り組みに生かしていただければと思います。本レポートの多くを占めているSDGsと授業や課外活動等での取り組みは武蔵野大学のSDGs実行宣言を体現し、大学らしさが伝わってきます。レポートの更なるレベルアップに期待しています。

[株式会社ブレンセンター 専務取締役 平石隆生様]

本レポートの目的の一部に「武蔵野大らしさの発信」と「学内の環境意識啓発」を挙げている。建学の精神とSDGsを掛け合わせた「SDGs実行宣言」のもと、各学部・学科、ゼミでの活動が紹介されていることは「らしさ」の発信として評価できる。また、学生が主体的に制作したことに学長が謝意を示し、学生と教職員の協働制作という今後の方向性に言及されたことは大きな成果であろう。報告内容に物足りない点はあるものの、環境負荷データの開示・分析を含め、今回の発行は学内に問題提起し、大学側に有意義なインサイトをもたらしたトライアルとして高く評価したい。

## ○内部からの意見

[広報課 足立京子課長]

「環境報告書があつたらいいな」という思いを出発点に、実際にキャンパス内の現状を様々な角度から調べて一冊にまとめられた松本さん、山根さんの行動力に感動しました。随所に学生さんらしい純粋な問いが見受けられ、楽しく読みつつ、私も勉強になりました。今後は、より多くの人に伝わるよう、編集やデザインをブラッシュアップしていけるとよりよい報告書になりそうです。活動を引き継ぐ後輩の皆さんに期待するとともに、広報課としてお手伝いできることがあればぜひ一緒に取り組みたいと思います。

[サステナビリティ学科 鈴木菜央准教授]

このサステナビリティレポートは、大学の取り組みを網羅的に紹介し、学生、教職員、事業者が協力して持続可能な社会を目指す姿勢を丁寧に描いています。学生のプロジェクトという枠を超えていく情報量と完成度になっています。特に、視覚的にも分かりやすい形で提示されている点、具体的な取組についてストーリーとして読める工夫が印象的です。今後は、読者の多様なニーズに応えるために、簡潔でインパクトのある表現や、具体的な目標・成果を明示する工夫、レポート全体の読みやすいレイアウトなどができると、さらに説得力が増すでしょう。

## [レポート作成に協力して下さった方々]

### 講師

明石修准教授、伊尾木慶子准教授、磯部孝行准教授、小俣智子教授、神吉宇一教授、金政秀教授、佐俣紀仁教授、白井信雄教授、鈴木菜央准教授、高橋和枝教授、橋本淳司客員教授、平湯直子教授、松田こずえ講師、真名垣聡准教授、三坂育成教授、村松陸雄教授 (五十音順)

### 学生

祝迫雅己さん、学生団体にわとり(清水美知花さん、小林千夏さん、戸田二巴さん、林利咲さん、今野こももさん)、千野亜真汰さん、つなぎ・つながる・みんなの広場(松本里咲さん、関口彩さん、戸田二巴さん、林利咲さん、山内亜里寿さん)、納田薫さん (団体名五十音順)

### 事業者・内部

ありあけ食堂(佐藤さん)、紀伊國屋書店(阿久津優さん)、広報課(足立京子課長)、ロハスカフェ(足立恵介さん) (組織名五十音順)

### 外部

株式会社エイチ・ユー山田建志様、株式会社ブレーションセンター平石隆生様、千葉大学倉阪秀史教授 (組織名五十音順)

## 〇編集後記

### [環境システム学科4年松本里咲]

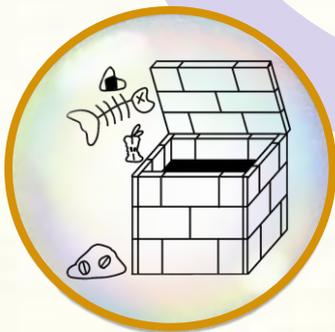
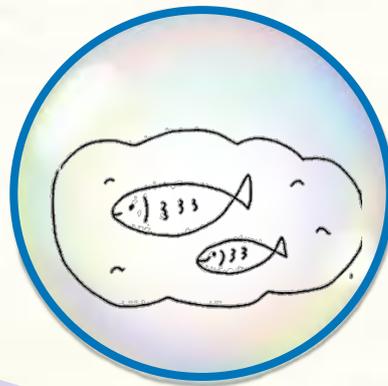
「武蔵野大学サステナビリティレポート2024」をご覧いただきありがとうございます。2年間かけて作成したサステナビリティレポートにはたくさんの想いと武蔵野大学らしさが溢れていると感じています。当初の予定より完成に時間はかかってしまいましたが、この活動を通して、伝わりやすい情報開示の仕方やさまざまな活動に潜んでいる想いなどを知ることができ、私も多くのことを学ぶことができました。このレポートには本学のサステナビリティに関する情報がたくさんつまっています。ぜひこのレポートをより多くの方に読んでいただき、皆様がサステナビリティに対して少しでも行動を起こすきっかけになれば嬉しいです。

### [環境システム学科4年山根あやな]

サステナビリティレポートが完成したことに、喜びと安堵の気持ちでいっぱいです。3年前期から始めた活動・レポート作成は、当初の予定より半年遅れての完成となりましたが、納得のいくものを作ることができました。この活動を通して、自分の思いを人に伝える難しさや、ひとつのものを作り上げる大変さなど様々なことを学びました。この経験は自分にとってかけがえのないものであり、レポートの完成は、大学での自分の学びの集大成であると感じています。本レポートは、現在の本学の環境への取り組みを知るのに役立つものであると考えています。ぜひ多くの人に読んでいただき、環境・サステナビリティの取り組みのきっかけになってもらえたら嬉しいです。

### [環境システム学科白鳥和彦教授]

本学において初めてとなるサステナビリティレポートが出来上がったことは感慨もひとしおである。構成や取り上げる項目・事例など全体の企画からスタートし、実際の記事の作り込みまで、全てをゼミ生主体で完成までこぎ着けた。山根さん、松本さんには敬意を表する。これを機に、本学の環境・サステナビリティの取り組みが今後よりレベルアップ出来るよう、また継続的にレポートの発行が出来るよう、体制や人作りを考えていきたい。取材や情報提供に協力頂いた学内の教職員・学生の皆さま、コメントや助言を頂いた学外の皆さまに、あらためてお礼を申し上げます。読者の皆さまには、レポートの内容や本学の取り組みについて、是非忌憚のないご意見を頂きたいとお願ひします。



発行 武蔵野大学工学部環境システム学科白鳥研究室  
〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3  
発行日 2025年2月